刀林

題字　故前田和三郎名誉教授
発　行　所
東京都新宿区信濃町35
慶應義塾大学医学部
外科学教室同窓会（刀林会）
発行人　松本純夫

慶應義塾大学医学部外科学教室
１００周年記念講演会を終えて

慶應義塾大学医学部
外科学教室　教室主任
北川　雄光（65回）

２０２０年12月26日、東京虎の門のザ・オークラ東京で慶應義塾大学医学部外科学教室１００周年記念講演会を開催いたしました。慶應義塾大学医学部外科学教室１００周年記念事業は、２０１７年４月28日に横浜グランドインターコンチネンタルホテルでキックオフミーティングを開催して以降、記念祝賀会開催と記念誌発行を２本柱に着々と準備を進めて参りました。１９２０年の外科診療開始からちょうど１００年にあたる２０２０年６月に盛大な記念祝賀会を行う予定でしたが、COVID-19感染拡大の影響で延期を余儀なくされました。しかし、２０２０年内に慶大外科の歴史を振り返り、未来に向けた決意を語る場を設けたいとの思いから、年の瀬に完全web配信で開催することといたしました。当日は４００名以上の刀林会会員のみなさまにご参加をいただき現地開催に優るとも劣らない素晴らしい記念の会となりました。会の記録は刀林会ホームページで閲覧できますので、ご出席が叶わなかった先生におかれましては是非ご覧いただきたく存じます。

本会は、現地開催を予定していたザ・オークラ東京の平安の間から規模を縮小し、会場をオーチャードに変更して完全web形式で行いました。外科学教室の黒田達夫教授（小児）、淺村尚生教授（呼吸器）、志水秀行教授（心臓血管）、北川雄光（一般・消化器）のほか、松本純夫刀林会理事長、司会の尾原秀明教室幹事と西村英理香君、若手医師代表の平田雄紀君と綿貫瑠璃奈君など、限られたごく一部のスタッフのみが会場に集まり、万全の感染対策のもと開催いたしました。

私が開会のご挨拶をさせていただいたあと、塾内外の多くの諸氏から寄せられたビデオメッセージを上映いたしました。塾内は、竹内勤常任理事、天谷雅行医学部長、武田純三三四会会長、松田美紀子病院事務局長、加藤恵里子病院看護部長、さらに外科学教室にルーツを持つ診療科として、森崎浩麻酔学教室教授、松本守雄整形外科学教室教授、戸田正博脳神経外科学教室教授、佐々木淳一救急医学教室教授からご祝辞をいただきました。さらにProf. Han-Kwang Yang (Seoul National University College of Medicine, Korea)、Prof. Patricia K. Donahoe (Massachusetts General Hospital, USA)、Prof. Ramon Rami Porta (Hospital Universitario Mutua de Terassa, Spain)、Thailand Prof. Surin Woragidpoonpol (Chiang Mai University)など慶大外科とゆかりのある海外の諸先生からも心のこもった英語のメッセージをいただきました。

講演会の前半は、現在の慶大外科診療科４教授がそれぞれの１００年の歴史を振り返るとともに、未来への熱い想いをみなさまへお届けいたしました。

講演会の目玉企画として、若手外科医の代表者が次の１００年の抱負を語る「若手外科医の未来に向けた宣言」の時間を設けました。代表の平田君、綿貫君が壇上で堂々と『慶應義塾大学医学部外科学教室をさらに盛り上げ、気品の泉源、智徳の模範、以て時代の先導となるべく努力し続けることを誓います。』と宣言してくれました。次代を担う彼らの力強く頼もしい声が会場に響き渡り、COVID-19による閉塞感に風穴を開けてくれました。みなさまも勇気づけられたと確信しております。

慶大外科１００年の節目の年に教室が開催した第１２０回日本外科学会定期学術集会を尾原教室幹事が報告しました。全17会場34チャンネルを全日程LIVEストリーミングで配信し、すべてのセッションの配信動画アーカイブ化を行うという外科学会初の試みが参加者数２万人超えという大成功に終わるまでの過程を発表いたしました。本学会の成功は、刀林会のみなさまの心のこもったご支援の賜物と改めて感謝申し上げます。

講演会の後半は、日本外科学会理事長の森正樹先生が、「これからの外科学」と題する特別講演を九州福岡よりリモートで行ってくださいました。ゲノム医療、再生医療、免疫療法を駆使したこれからの外科学についてのご講演は、未来を見据えた素晴らしい内容で、教室１００年の記念すべき特別講演にこのような歴史的なご講演をいただけたことは、我々にとっても大変光栄でした。

閉会の辞では、松本純夫刀林会理事長が、２０２０年の前年に急逝された北島政樹前理事長への思いや若い先生方の誓いに触れ、「これからの50年、１００年を考える今でありたい」と述べられて記念講演会は幕を閉じました。

教室１００周年と第１２０回外科学会というの教室の２大事業は、COVID-19感染によって大きな変更を余儀なくされました。しかしながら、この未曽有の困難のなか学会に続き記念講演会をも盛会に終えることができたのは、刀林会のみなさま、視聴くださったみなさまのご尽力があってこそと心より感謝申し上げます。慶大外科が１００年を迎えた２０２０年は、慶大外科の結束力の強さを改めて痛感する年となりました。刀林会のみなさまが直に杯を交わし、過去や未来について熱く語り合う会は、COVID-19感染終息後に必ずや開催したいと考えております。教室１００周年記念事業は、記念誌の発刊も間近に控えております。引き続き本記念事業へのご支援賜りますようお願い申し上げます。

院長就任

国家公務員共済組合連合会 立川病院

片井　均（61回）

私は１９８２年に一般消化器外科学教室に入局し、胃がん治療を専門としました。１９９３年からこの３月まで国立がん研究センター中央病院に勤務し、低侵襲手術から拡大手術まであらゆる胃がん外科治療を提供するとともに外科治療の有用性を検証する臨床試験を主任研究者として実施してきました。２０１４年に副院長となり病院の運営にも携わってきました。２０２１年４月１日より立川病院の院長として多摩地区の地域医療を支援する指揮を執ることになりました。

立川病院は、東京都立川市にある地域医療支援病院・東京都指定二次救急医療機関に指定されている４５０床の急性期総合病院です。国家公務員共済組合連合会の直営病院で、刀林会の皆様には「立川共済病院」として認知されていると思います。最近では、国家公務員だけのためでなく地域住民のための病院ですので「立川病院」という名称に親しんでいただくようにしています。「質の高い、思いやりのある医療を実践する。」を病院の理念として掲げています。

立川市は、首都圏における「業務核都市」や、東京圏における「核都市」にふさわしいまちづくりを目指し、都市のうるおいや環境にも配慮し発展続けており、こうした都市機能の維持には病院機能の充実が欠かせません。立川病院は陸軍病院として創設以来、戦前戦後を通じ、立川市の中核病院として地域医療を支える病院として、市民病院的役割を担ってきました。２０１７年新病院棟を開設し、病院のすべての機能がひとつの建物に集約し、利便性の向上はもとより、より高い水準の医療を迅速に行うことが可能になりました。

１９５１年12月に前田和三郎先生が病院長になられています。１９５４年12月から慶應義塾大学部医学部外科学教室の教育関連施設となり、刀林会出身者としては佐藤孝次先生（胸部外科31回）が院長を務められています。

常勤医師が１１１名おりますが約９割が慶應義塾の医局出身者です。外科は血管外科　秋山芳伸（部長69回）、呼吸器外科　山本達也（部長67回）、木下智成（86回）、消化器外科　亀山哲章（部長72回）、武居友子（86回相当）、矢作雅史（88回）、益田悠貴（90回）、乳腺外科　服部裕昭（部長72回相当）と外科学教室から派遣していただいている５名の非常勤医師で診療を行っています。拡大手術から低侵襲手術まで、DaVinci手術を除くほぼすべての手術が可能です。

立川病院は、急性期病院としての機能を果たしつつ、保健所および地域の医療機関からの依頼を受け新型コロナウイルス感染症患者さんを積極的に受け入れています。職員全員が自身や家族等の感染対策を徹底した上で、発熱外来設置など、院内感染を阻止する対策をとり、通常の外来・入院治療、手術、救急外来等、すべての病院機能を維持しています。

コロナ禍はいまだ収束しませんが、新院長には「ポストコロナ」に向けて病院を再起動し、さらに活性化する役目があります。がん専門病院での経験を活かし、がん治療センターなどの立ち上げなどにより、がん医療の充実を図り、東京都がん診療拠点病院の認可を得るための努力は惜しみません。教育に関しては国内のみならず多くの海外からの医師も指導してきました。立川病院においても大志をいだいている若手医師の教育を充実させ広い視野をもった外科医を育てていくつもりです。

刀林会の先生には益々のご指導、ご支援をお願いいたします。

院長就任

新院長挨拶　栃木医療センター

田村　明彦（67回）

この４月より独立行政法人国立病院機構栃木医療センターの院長を拝命致しました。

当院は明治41（１９０８）年に陸軍病院として開設され、終戦の昭和20（１９４５）年、厚生省の管轄となって国立栃木病院として再スタートしました。初期の院長は暫定的に陸軍などの関係者でしたが、昭和23（１９４８）年３代目院長として青木清四郎先生（産婦人科、２回）が慶應より赴任、実質初代院長として、戦後の混乱の中からその後の繁栄の基礎を築きました。昭和29（１９５４）年激務のため院長室にて倒れたため、４代目院長として鎌田竹次郎先生（外科、１回）が国立埼玉病院より赴任、５代目院長は赤倉一郎先生（外科、13回）です。この頃は北関東の中心的病院でした。以後、刀林会の院長は、９代目山崎晋先生（47回）、10代目勝又貴夫先生（52回）、私が12代目になります。

病床数は３５０、医師数70、医師については、外科系は慶應からの派遣、内科は総合診療科に若手の有名医師がおり、全国から集まっています。地元の他大学から当院に就職希望の医師については、医局人事の期間が満了してから来るようにお願いしているため、それらの医師の下に派遣が来ることはありますが、他大学医局の科は今のところありません。外科は鈴木慶一部長（74回）以下６名で、年間６００件以上の手術に対応しています。

思い返せば栃木県との縁は深く、１９９０年に済生会宇都宮病院で研修医生活を送り、大学に戻った後も３年間診療の手伝いに来ていました。２０００年から３年半、那須赤十字病院にて一般外科と救急に従事した後、２年間のドイツ留学を経て、２００５年９月に栃木病院外科医長として赴任しました。

新型コロナウイルスについては、クルーズ船患者から対応を開始し、軽中等症を中心に、５００例以上入院を受け入れており、栃木県の全入院症例の10％以上となります。早期から保健所と良好な連携をとり、病棟、宿泊療養施設、在宅待機患者を一括して管理調整し、県内でもモデル的存在となりました。我が国のコロナ感染症ももう少しで収束に向かうと思われますが、先送りにしてきた急性期疾患のリバウンドが落ち着くにはさらに１－２年かかるかもしれません。

２０１１年から病院幹部として様々な仕事をしてきましたが、院長になって改めて、絶えることのない課題が遥かかなたまで広がっているのを実感しています。今後とも刀林会の皆様のご指導ご支援をよろしくお願いいたします。

院長退任

済生会宇都宮病院

小林　健二（55回）

令和２年３月31日をもちまして済生会宇都宮病院院長を退職いたしました

４年間という短い間ではありましたが大過なく職務を果たせましたのもひとえに皆様方のご支援ご厚情によるものと心より感謝いたしております。過ぎてしまえば苦労したことも充実した時間であったと感じることができました。

平成28年就任時、当院にはいくつかの課題があることを認識しており、問題解決を少しでも前進させることができればというつもりで院長就任を引き受けました。

一番目の課題は病院移転後、地域ナンバーワン病院としての評価が定着してきたこともあり、緊張感の薄れから患者、地域医療機関へのサービス低下が見られるようになったことでした。院長になってまず取り組んだことは患者満足度向上のために、院内のコミュニケーションをよくする「あいさつ運動」を実施したこと、つぎに院内のベクトルを合わせることを意図して職員間の協議を経て、し組織と個人が共有出来る理念と価値観を設定し事業を推進するとともに人材育成にも活用しました。二番目の課題は病院移転後20年を超え、老朽化も目立ち始め、15―20年後に迫っている新病院建設に向けての将来構想に道筋をつけていくことでした。「高度急性期医療・救急医療」の充実のために必要な設備の拡充、優秀な人材の確保、そして新病院建設のための経営基盤の安定化が求められたことから、病床整備に関するプロジクトを経て設備計画を作成しました。その結果病床数は現状のままとし３年計画で新管理棟建設、事務移転、医局移転、ICU移転拡充、手術室増築（ハイブリッド手術室）、PFM、口腔ケアを中心とした歯科診療、外来化学療法室の拡充などを実施することにしました。

工事はほぼ予定通りに完成し、手術・救急・ICU収益の増加などによる収益改善、聖域なし費用の見直しによる費用削減により、厳しい経営環境の中、経営収支が改善し、医師も26人増加、一連の計画はほぼ投資に見合った成果を上げることができ、今後待ち構える新病院建設計画の第一歩を踏み出すことができました。

令和２年年初からの新型コロナ感染の拡大によって最後の院長講演などの行事が中止になってしまいましたが、４月からは栃木県済生会支部長に就任しコロナ禍で苦労している病院、高齢者ケアセンター、乳児院、看護学校、訪問看護ステーションを引き続きバックアップしたいと考えています。厳しい医療政策のなかで安定的な経営基盤の構築と、地域中核病院としての役割を果たす目標は野間新院長（59回内科）に引き継いでいただきました。ますます荷が重い院長職ですが慶応関連病院会の中で引き続きご指導、ご支援の程よろしくお願い申し上げます。

教授就任

藤田医科大学医学部
先端ロボット・内視鏡手術学講座

宇山　一朗（64回相当）

この度、２００６年５月より15年間務めさせていただきました総合消化器外科学講座（２００６年～２０１７年までは上部消化管外科学講座）の講座教授を２０２１年３月末で辞し、２０２１年４月１日付で藤田医科大学医学部に新設されました先端ロボット・内視鏡手術学講座教授を拝命いたしました。これまでに刀林会の諸先生方より多くのご指導、ご支援を賜りましたことを熱く御礼申し上げます。特に、刀林会理事長、東京医療センター名誉院長松本純夫先生、一般消化器外科学教授北川雄光先生には多大なるご支援、ご指導を賜り、この場をお借りして、深く感謝申し上げます。また。故・北島政樹先生には、アカデミック外科医の重要性も含め、多くのご指導、ご支援をいただきました。心より感謝申し上げるとともに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

私は、１９８５年３月、岐阜大学医学部を卒業し、同年、慶應義塾大学外科学教室に入局させていただきました。フレッシュマンを終了後、練馬総合病院で飯田修平先生、立川共済病院で故守谷孝夫先生に厳しく、手術学とは何か、基本手技の重要性を叩き込まれ、帰室後は胃班に所属し、故石引久弥先生、吉野肇一先生、熊井浩一郎先生をはじめ多くの先生方にご指導をいただきました。

その後、１９９１年５月より６年間練馬総合病院で勤務し、胃癌に対する拡大リンパ節郭清、内視鏡外科手術の習得に努めました。１９９７年５月より、故北島政樹先生のご配慮により、藤田保健衛生大学（現藤田医科大学）消化器外科第Ⅰ講座に移動し、患者さんに優しい傷の小さい胃癌に対する腹腔鏡手術の導入、さらには進行胃癌への適応拡大に全力を尽くしてきました。２００９年からは、真の意味での低侵襲手術は、小さい術創のみならず、低い術後合併症発生率が必要と考えロボット支援下手術を導入し、ロボット手術手技の確立、有用性の検証、保険収載に尽力してまいりました。今回、藤田医科大学理事長星長清隆先生の命により、消化器外科にとどまらず、泌尿器科、婦人科、呼吸器外科など臓器領域横断的にロボットを中心に内視鏡手術をサイエンスとして捉え、国産内視鏡手術支援ロボットの開発、新術式の開発、臓器を超えた教育システムの確立などを行うことを目的とした先端ロボット・内視鏡手術学講座が新設され、教授を拝命いたしました。すでに還暦を過ぎてから新設講座の運営を任せられることに対する不安もありますが、残された外科医人生を、この新設講座の発展に努めたいと考えております。私の後任として須田康一先生（79回）が、総合消化器外科学講座の教授に就任しております。今後も、須田康一ともども、刀林会の皆様方のご指導、ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

漢方医学と西洋医学の融合により
世界で類のない最高の医療提供に貢献します

自然と健康を科学する
漢方のツムラ
https://www.tsumura.co.jp/
●お問い合せは、お客様相談窓口まで。
【医療関係者の皆様】Tel.0120-329-970【患者様・一般のお客様】Tel.0120-329-930

教授就任

東京歯科大学市川総合病院
心臓血管外科

井上　仁人（69回）

令和三年四月一日より、東京歯科大学市川総合病院心臓血管外科教授を拝命いたしました。１３０年の伝統ある東京歯科大学の教授として勤務する機会を頂き、大変光栄であるとともにその責任を感じております。就任にあたり、ご推薦・ご支援いただきました諸先生方に心より感謝申し上げます。

私は平成二年に慶應義塾大学医学部を卒業し、外科学教室へ入局しました。チーフレジデントまでの７年間の研修を終了後、済生会宇都宮病院と平塚市民病院で各12年間、臨床の第一線で仕事をして参りました。この30年間に執刀した心臓血管外科手術３０００症例の経験で得た知識と方法論を活かして、東京歯科大学と附属病院の発展に貢献していきたいと考えています。

臨床においては、狭心症に対するオフポンプバイパス手術、弁膜症に対する弁形成術、大動脈瘤に対するハイブリッド手術などに力を注いで参りました。最近は、自己心膜を用いた大動脈弁形成術に特に力を入れております。これは人工物を使用しないため、患者さんにQOLの高いdrug-freeな生活を提供できる優れた術式です。この新しい日本発の技術は、世界中で導入されつつあり、先天性・後天性の両分野で今後さらに広まっていくと考えています。この手術を市川総合病院に導入し、より多くの患者さんがこの治療を享受できるように努力していきたいと考えています。

臨床研究では、私は「Made-in-Japanのオリジナリティ」を基本理念として、地域の基幹病院において実践的な独自の手術方法の開発に心血を注いで参りました。心臓血管外科は誕生してからの歴史は浅いため、数年前のスタンダードな治療が古くなることが日常茶飯事です。常にリニューアルしていく臨床現場は、まさに研究・開発の源となるアイデアの泉であります。私は、その泉の中で働く若手の創造するセンスを磨き、革新的外科技術の開発に挑戦する手助けをしていきたいと考えています。切迫した臨床の現場で、最善の治療を求めて最大限に創造的思考を深める中でこそ、斬新な臨床の閃きが得られると考えています。

慶應義塾大学と東京歯科大学が一つの組織として纏まっていくこの時期に、このような機会をいただいたことを感謝しつつ、微力ではございますが、慶應義塾大学と東京歯科大学および東京歯科大学市川総合病院の発展に精一杯寄与できるよう努めていく所存です。

今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

教授就任

慶應義塾大学看護医療学部

堀口　崇（69回）

このたび、２０２１年４月１日付けで慶應義塾大学医学部より看護医療学部に移籍し教授に就任いたしました。今後は、看護医療学教育ならびに健康マネジメント研究の指導を主たる業務とし、脳神経外科学教室における活動は兼担となります。

慶應義塾における看護教育の歴史は北里柴三郎先生が慶應義塾大学医学科付属看護婦養成所を設置された１９１８年（医学科が創設された翌年）にまで遡りますが、看護医療学部は、２００１年に21世紀の看護医療の先導的役割を果たす人材育成を目的として開設され、今年で創設20年を迎える慶應義塾大学の第９番目の比較的新しい学部です。「看護医療学部」という名称は、病気を治すcureと癒すcareの一体化を示す慶應医学の理念そのものです。開設にあたって設置された委員会の中心におられた吉野肇一先生は、看護医療学部教授さらには看護医療学部長として強力なリーダーシップを発揮され、開設直後の新学部を牽引されるとともに今日の学部発展に至る多大なる功績を残されました。

看護医療学部において私が担当する急性期病態学は、外科治療を必要とする疾患を対象とする講座です。２０２１年度春学期の開講にあたり、医学部外科学教室からは12名の輝かしい実績を誇る最高の講師陣をご推挙頂きました。私も看護医療学部生と同じ目線に立ち、一から学習するつもりで全ての講義動画を視聴させて頂いておりますが、近年の外科学の発展に改めて驚かされるとともに、講師のお一人お一人が心を込めてご準備下さった講義と資料の質の高さと理解しやすさに心底感激しております。人選にご高配賜りました皆様と講義をご担当下さる講師の皆様に、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

あらゆる臨床現場において、医師に加えて看護師を中心に多職種から編成されるチーム医療が不可欠なことは言うまでもありません。医学部から看護医療学部へ移籍した私に求められる役割は、慶應義塾大学看護医療学部創設の理念を継承実践し、cureとcareのバランスを保ちながら、両学部をさらに発展させる強力な架け橋となることに他ならないと考えております。

私は１９９０年の医学部卒業以来、臨床、研究、教育の三本柱から、人生における様々な指針まで、一貫して刀林会の諸先生より多くのご指導を賜りながら外科医としての日々を歩んで参りました。所属は変わりますが、医療界で新たに与えられた職務に誠心誠意取り組んで参る所存です。これまでに賜りましたご厚情に、改めまして心より感謝申し上げますとともに、今後とも変わらぬご指導ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

Abraxane®
抗悪性腫瘍剤　薬価基準収載
特定生物由来製品、毒薬、処方箋医薬品（注意―医師等の処方箋により使用すること）
アブラキサン®点滴静注用100mg
Abraxane® I.V. Infusion 100mg
パクリタキセル注射剤（アルブミン懸濁型）
「効能・効果」、「用法・用量」、「警告、禁忌を含む使用上の注意」、「効能・効果に関連する使用上の注意」、「用法・用量に関連する使用上の注意」等については添付文書をご参照ください。
製造販売元 TAIHO 文献請求先及び問い合わせ先 大鵬薬品工業株式会社 〒101-8444 東京都千代田区神田錦町1-27 TEL.0120-20-4527 https://www.taiho.co.jp/
提携先 Abraxis BioScience 米国
2021年6月作成

血液凝固阻止剤
アコアラン®静注用600 1800
600国際単位、1800国際単位／バイアル
ACOALAN® Injection アンチトロンビン ガンマ（遺伝子組換え）静注用
生物由来製品　処方箋医薬品㊟　薬価基準収載
（注意-医師等の処方箋により使用すること）
※効能・効果、用法・用量、禁忌を含む使用上の注意等については、添付文書をご参照ください。
製造販売元 協和キリン株式会社 東京都千代田区大手町1-9-2
販売元 JB 一般社団法人 日本血液製剤機構 東京都港区芝浦3-1-1
ACO-202010
［文献請求先及び問い合わせ先］
日本血液製剤機構　くすり相談室　〒108-0023 東京都港区芝浦3-1-1　医療関係者向け製品情報サイト　https://www.jbpo.or.jp/med/di/

教授就任

東海大学医学部消化器外科学領域主任教授就任

小柳　和夫（71回）

この度、２０２１年４月１日付で、東海大学医学部消化器外科学領域主任教授を拝命いたしました。刀林会の諸先生方には、これまで格別のご支援とご厚情を賜りましたこと、厚く御礼申し上げます。特に、慶應義塾大学病院長、慶應義塾大学医学部外科学教室教授北川雄光先生、前東海大学医学部消化器外科学領域主任教授小澤壯治先生、そして東海大学医学部顧問幕内博康先生には多大なるお力添えをいただき、深く感謝申し上げます。

私は１９９２年３月に慶應義塾大学医学部を卒業し、直ちに外科学教室に入局しました。伊勢原協同病院、足利赤十字病院への教育出張を経て、帰室後は一般・消化器外科　食道班に所属し、安藤暢敏先生（50回）、小澤壯治先生（60回）、北川雄光先生（65回）に食道疾患の臨床と研究のご指導をいただきました。また、故上田政和先生（53回）に研究のご指導をいただきました。１９９８年から水戸赤十字病院にチーフ出張後、故北島政樹先生（45回）のご高配で、米国コーネル大学、東京都済生会中央病院への一時帰国をはさみ、John Wayne Cancer Institute に留学の機会を与えていただきました。帰国後は平塚市民病院、埼玉医科大学国際医療センター、川崎市立川崎病院、国立がん研究センター中央病院に勤務しました。そして２０１８年４月に東海大学医学部消化器外科に異動し、小澤壯治先生（60回）のご指導をいただき食道疾患を中心とした診療、研究とともに、教育に取り組んでまいりました。

東海大学医学部は歴史的に刀林会とのつながりが深く、消化器外科学教室では、これまでに故三富利夫先生（34回）、幕内博康先生（49回）、生越喬二先生（50回）、貞廣荘太郎先生（57回）、小澤壯治先生（60回）、山本聖一郎先生（70回）と各教授によって引き継がれ、常に最新医療を積極的に取り入れ、実践されてきました。また、東海大学医学部では「良医の育成」という理念のもと、人格豊かで幅広い視野とヒューマニズムに基づく使命感を持った医師の育成が脈々と受け継がれてきました。私も諸先輩に少しでも追いつけるように精進してまいります。

消化器外科学はまさに日進月歩で進歩しており、その進歩は年々早まっています。グローバルな変化の中で、これまで以上に消化器外科学の発展に尽力し、東海大学病院、そして地域医療に貢献したいと考えています。多くの先生方からいただいた教えを受け継ぎ、一人でも多くの若手外科医を育てられるように努力してまいります。今後とも刀林会の皆様のご指導ご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

教授就任

埼玉医科大学総合医療センター呼吸器外科

河野　光智（72回）

令和３年４月１日付で埼玉医科大学総合医療センター呼吸器外科教授を拝命いたしました。平成５年に慶應義塾大学を卒業し、同大学病院、国立療養所晴嵐荘病院、都立駒込病院で呼吸器外科医として研鑽を積み、東海大学准教授を経て、現在に至っております。就任にあたり小林紘一慶應義塾大学名誉教授、中山光男埼玉医科大学総合医療センター教授、淺村尚生慶應義塾大学教授をはじめ、慶應義塾大学医学部外科の各先生よりこれまで格別のご支援とご厚情を賜りましたことを心より御礼申し上げます。

私は呼吸器外科領域の幅広い可能性に魅力を感じ、呼吸器の外科治療全てにおいて最高の医療を提供できるようにと思い、学んで参りました。各病院で優れた先輩方・同輩・後輩達に巡り合い、肺癌に対する拡大手術や胸腔鏡手術、炎症性肺疾患に対する手術、気道のインターベンションなどを習得することが出来ました。その技術とこれからさらに拡がる可能性を医局員たちと共に学びそして伝えていこうと思います。総合医療センター呼吸器外科では中山光男教授のリーダーシップのもと、肺癌や縦隔腫瘍に対するロボット手術を開始しており、私もチャレンジしていく所存です。同センターの儀賀理暁緩和医療科教授（呼吸器外科兼担）は大学の同期であり、また一緒に働くこととなってお互いに喜んでいます。

また、肺移植が先進的に行われている京都大学、デンマークのコペンハーゲン大学で、肺移植の臨床経験を積むとともに、実験や研究も行ってまいりました。肺移植は、間質性肺炎や肺気腫を含むほぼ全ての進行性肺疾患に対する最終手段となる治療法です。しかし、埼玉県内には肺移植を行う病院がありませんので、近郊の重症肺疾患の患者さんは治療を諦めてしまったり、遠方に肺移植を受けに行ったりせざるを得ないのが実情です。患者さんご本人とご家族の身体的、社会的、そして経済的負担は非常に大きなものです。総合医療センターが肺移植施設認定を受け、患者さんに肺移植を提供出来ることを目標に、準備していこうと思っております。

マサチューセッツ総合病院放射線腫瘍科への留学では癌の原発巣の間質細胞が癌細胞と一緒に転移するという大胆な仮説を立て、オリジナルの動物モデルを作製して証明し、米国科学アカデミー紀要（PNAS, 2010）に発表しました。この論文は注目を集めScience 誌の Editor's Choice で取り上げられました。帰国後は人工赤血球の外科手術への応用や、肺悪性腫瘍に対する経気管支的凍結療法、肺移植におけるマイクロサンプリング法による気道上皮被覆液の解析など、外科医にしか出来ないモデルを作製して幅広く研究を行なってまいりました。

学生や若い医師たちに呼吸器外科と肺移植、そして実験研究の魅力を伝え、ともに働く仲間を増やし、地域の医療に貢献していく所存です。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

教授就任

藤田医科大学医学部 総合消化器外科学講座

須田　康一（79回）

この度、本年４月１日付けで藤田医科大学医学部総合消化器外科学講座　主任教授を拝命致しました。これも北川雄光教授、宇山一朗教授をはじめ、皆様のご指導・ご支援の賜物と心より御礼申し上げます。

私は、２０００年に慶應義塾大学医学部を卒業し、外科学教室に入局しました。２００３年より一般・消化器外科　上部消化管班（旧食道班）に所属し、「侵襲に対する生体反応の予測と制御」をライフワークとして診療・研究・教育に励んでおります。特に、２０１０年に宇山一朗教授率いる藤田保健衛生大学上部消化管外科学に赴任して以来、一貫してロボット手術の手術手技開発とその普及・啓発活動に全力を注いで参りました。世界では、マスター／スレーブ方式のロボットを介して得られる術者や患者に関する様々な外科的医療情報（surgical intelligence）を求めて、数多くの企業がロボット手術に参画しつつあります。一方で私たちは、ロボットを使いこなして悪性腫瘍手術のコンセプトを理想に近いかたちで体現し続けることで、手術の安全性のみならず長期予後までも改善できる可能性に肉薄しています。　現　在 Sysmex 社、Medicaroid 社と連携して、本邦初の実用型内視鏡手術支援ロボット hinotori™ サージカルロボットシステムを核とした遠隔手術プラットフォーム構築を急ピッチで進めています。このプラットフォームを介して、アニマルやカダバーを用いたサージカルトレーニング、熟練者による手術指導を、より多くの外科医にとって身近なものとしつつ、surgical intelligence を活用した新たな手術支援・手術室運用支援システム、手術教育コンテンツの開発を進め、より多くの患者さんに根治性が高く合併症が少ない精緻な先端外科手術をお届けできるよう、鋭意努力して参る所存です。

また、当講座は今回の組織改変を契機に、１９７１年に本学医学部が開設されて以降初めて、上部消化管、下部消化管、肝胆膵を束ねて「１講座１講座主任制」に移行致しました。私と同期（79回生）の肝胆膵班・高原武志先生を医局長兼肝胆膵班班長として、がんゲノム医療や最新のがん薬物治療、肝移植、腹部救急疾患への対応、周術期管理など、多職種連携が不可欠な分野にもこれまで以上に積極的に取り組み、専門性を高めつつ裾野を広げ、皆様により一層貢献できるよう全力を尽くす所存です。

今後とも変わらぬご指導ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

教授退任

東海大学医学部消化器外科 領域主任教授を退任して

医療法人幸隆会多摩丘陵病院
副院長・外科部長
小澤　壯治（60回）

このたび２０２１年３月31日をもちまして東海大学医学部を定年退職いたしました。刀林会の先生におかれましては、在職中、公私にわたり格別のご支援とご厚情を賜り、深く感謝申し上げます。

２００９年７月１日に、故北島政樹先生（45回）、幕内博康先生（49回）、そして北川雄光先生（65回）のお力添えにより、藤田保健衛生大学（現藤田医科大学）から東海大学医学部消化器外科に教授として赴任することができました。東海大学での約12年間、指導者・外科医・大学人の３つの役割を念頭に仕事を進めて参りました。

＊指導者として

慶大外科で培った手術手技や研究を心の支えに低侵襲手術の導入と教育活動に専念いたしました。目標の一つは、在任中に教室員の中から「日本内視鏡外科学会技術認定医合格者を出す」ということでした。当時、東海大学医学部消化器外科から合格者は一人もおりませんでしたので、食道癌のハイボリュームセンターを大いに活用すべきと考えたからです。お陰様で、低侵襲手術の導入から手技の定型化を経て７～８年で食道領域の合格者を２名出すことができました。

２０１６年４月に領域主任・診療科長を拝命してからは、学内外からわかりやすい体制への改革を徐々に進め、２０１９年４月から食道班と胃班を上部消化管班として統合させ、上部消化管班・下部消化管班・肝胆膵班の３つのグループに組織改編いたしました。また、領域主任の役割として伊勢原の本院に加えて大磯・東京・八王子の付属病院と関連病院も含めた教室全体のことを考えなくてはならず、特に人事については慶大外科がすでに導入していた人事アンケートを参考にして、教室員の将来構想や目標、希望などを確認しました。それぞれの意思を丁寧に確認し、調整を行ってきました。退職の際に、教室員の一人からアンケートの導入について「教室員に対する公平性が採用されていた」というメッセージを受け取り、理解が得られていたことを嬉しく思いました。

役職にかかわらず、指導者の一番大切な役割は人材育成だと考えています。いかに後進を育てるかで、その組織の在り方は大きく変わるということを東海大学で学びました。

＊外科医として

東海大学医学部付属病院は神奈川県西部を中心とするハイボリュームセンターです。私は幸運にも専門領域である食道癌手術を多数執刀することができました。東海大学に赴任して食道癌に対する腹臥位胸腔鏡下食道切除術を導入しましたが、麻酔科や手術室が抵抗なく導入を受け入れてくれ、症例を着実に集積することができました。後から知ったのですが、赴任前に幕内先生が関係部署に働きかけてくださっていたそうで、このようなご配慮に感服し、私も倣うべきことと感じました。

再び手術支援ロボット da Vinci での手術ができるようになったことも思いがけない幸運でした。私が初めて da Vinci での手術を行ったのは慶應義塾大学病院で２０００年３月に胃食道逆流症に対する腹腔鏡下 Nissen 手術でした。東海大学で２０１９年８月に食道癌に対する胸腔鏡下食道切除術を導入してから２０２１年２月までに32例執刀し、プロクターの資格を取得することができました。ハイボリュームセンターという理由だけでなく、教室員や手術室、麻酔科など関連スタッフの協力があって実現できたものと感謝しています。東海大学ではチーム医療の重要性を再認識できた12年間でした。

＊大学人として

慶大外科在籍時に「大学人とは」として指導されたことは、①新しいことの探求、②学位指導、そして③研究費獲得です。理工学部と長年にわたり共同研究を行ってきた最新の Haptics 鉗子の研究を東海大学でも実施し、大学院生の学位論文に繋げることができました。また基礎研究では、東北大学加齢医学研究所や静岡県立静岡がんセンター研究所など予想もしなかった出会いがあり、新しく共同研究を開始し、４名の先生方の学位論文が完成できました。

また研究費獲得については、慶大外科で故上田政和先生（53回）に鍛えていただきました。大学人たるもの「文部科学省や日本学術振興会の科学研究費補助金」などの公的研究費の申請は必須と教えられましたので、退職するまで途切れることなく申請し、幸いにも交付されてきました。公的資金の獲得実績は、所属施設のみならず世間一般においても研究者としての資質や信用が問われるものだと思います。東海大学での大学人としての生活は、「研究者」として楽しく活動することができた日々でした。

私が東海大学で３つの役割を果たしていく中で、要所要所で刀林会の先生方に助けていただきました。皆様に改めて心より感謝を申し上げます。このご縁はずっと大切にしていきたいと思います。そして今度は私が恩返しをする番です。４月からは掛川暉夫理事長（33回）と島津元秀院長（53回）のご指導の下で、医療法人幸隆会多摩丘陵病院で副院長・外科部長として勤務しております。島津先生は指導的助手として若手医師の手術に数多く入られており、私も島津先生を見倣って若手医師の育成に全力を尽くす所存です。

今後とも引き続きご指導ご鞭撻賜りますようよろしくお願い申し上げます。

教授退任

東京歯科大学市川総合病院 心臓血管外科教授退任にあたって

申　範圭（61回）

私は、2005年4月の東京歯科大学市川総合病院心臓血管外科の開設に伴い、同教授に着任し、16年間の勤務を終えて2021年3月末日の定年退職にともない教授職を退任致しました。

市川総合病院に心臓血管外科が開設される1年前に、同病院から慶應義塾大学心臓血管外科教授であられた四津良平先生に開設の協力依頼が届きました。当時、私が市川総合病院循環器内科から多くの手術患者さんの紹介を頂いていた関係から、開設に向けてのコンサルタントの任を承りました。具体的には、専用手術室の設計、人工心肺装置、手術器具、ICU機器等の選定、MEをはじめ必要なスタッフの選任と教育などで、ほぼ毎週末に出かけて準備を行いました。そうした経緯から、当時の医学部長北島政樹先生と四津先生の推薦を頂き、私が教授に着任いたしました。

着任後は、市川総合病院病院長であられた畠亮先生（泌尿器科、43回）、副院長の安藤暢敏先生（外科、50回）をはじめ、多くの同門の先生方の応援を頂きました。四津先生、志水秀行教授には、在職16年にわたりスタッフを派遣していただき、心より感謝申し上げます。市川で研修した若い先生方が、心臓血管外科専門医を取得し、その後、慶應関連施設で大いに活躍している現状を思うと嬉しい限りです。個人的には、市川市で初となる心臓血管外科を開設する貴重な経験ができ、弁尖温存のdynamic repairによる僧帽弁形成術、橈骨動脈を積極的に用いた多枝冠動脈バイパス術、虚血性心筋症に対する左室形成術、弓部大動脈手術における一側順行性脳灌流法などに取り組みました。千葉県東葛地域に心臓血管外科医療を根付かせることに少しは貢献できたと考えています。また、退任まで外科医として執刀を続けることが出来ましたことは、外科医として有り難い限りです。

在職中に大きな医療事故もなく、無事退任の日を迎えることが出来ましたのは、外科学教室と刀林会からの多大なるご支援の賜物と厚く御礼申し上げます。後任の井上仁人教授のもとに市川総合病院心臓血管外科の隆盛を願い、外科学教室と刀林会の益々の発展を祈念し退任のご挨拶とさせていただきます。

教授・院長退任

聖マリアンナ医科大学東横病院

宮島　伸宜（61回）

2007年4月より14年間、聖マリアンナ医科大学東横病院に勤務させて頂きました。2007年は東横病院のリニューアルオープンの1年前にあたります。徐々にできあがっていく建物を見ながら完成を楽しみにしていたことを昨日のことのように思い出します。14年間、刀林会の先生方をはじめとして多くの人のお力添えを賜り、助けられてきました。改めまして心より御礼を申し上げます。

2008年のリニューアルオープンはゼロからのスタートで、多くのスタッフと協力しながらつとめて参りました。私は消化器・一般外科の一員として腹腔鏡下手術の普及と技術の定着を目指して多くの先生方と協力してきました。日本内視鏡外科学会の技術認定試験は合格率が3割程度とかなりの難関ではありますが多くの先生方が合格したことを嬉しく思っています。

2014年4月より東横病院長を拝命致しました。力不足ではありましたが、多くの先生方やスタッフに支えられて7年間があっという間に経過致しました。病院の経営に携わることは初めての経験でしたし、財務諸表など読んだことがありませんでしたので病院長に就任したと言うよりも、病院長として育てていただいたと思っています。2019年10月より日本大腸肛門病学会理事長を拝命し、2020年11月には第75回日本大腸肛門病学会を会長として主催させていただくこともできました。これも多くの先生方のご協力のおかげと感謝しています。

慶應義塾大学医学部外科学教室では大腸班に属し、大腸肛門機能を研究テーマにして肛門の病理で博士号を取得しました。いつかは原点回帰をしたいという思いを持ちながらすごして参りました。2021年4月よりご縁があり、横浜の松島病院に勤務することとなりました。6月からは病院長として新病院建築に向けて邁進して参る所存です。

聖マリアンナ医科大学東横病院勤務中は刀林会の先生方に本当にお世話になりました。皆様方のご健勝とご活躍を祈念申し上げまして、定年退職の御挨拶とさせて頂きます。本当に有難うございました。

第52回日本心臓血管外科学会学術総会

埼玉医科大学国際医療センター
小児心臓外科教授
鈴木　孝明（62回）

この度、2022年3月3日（木）～5日（土）の3日間にわたりパシフィコ横浜ノースにおいて第52回日本心臓血管外科学会学術総会を開催させていただくことになりました。これも一重に、刀林会会員の皆様のご厚情とご支援の賜物であり心より御礼申し上げます。

本総会は第14回（1984年）を井上　正先生、第30回（2000年）を今井康晴先生が会長として開催されました。刀林会員としましては22年ぶりの開催であり、また伝統と実績のある本学会の学術総会を開催できることは、私どもにとって大変な栄誉であり大きな成果を上げたいと思っております。

さて、人口の高齢化やライフスタイルの欧米化などによって心臓血管疾患は年々増加の一途をたどり、病態も複雑化しており、当然ながらその診断、治療のプロセスも急速に変化してきております。その中で、心臓血管外科分野の中心的存在である日本心臓血管外科学会は心臓血管外科領域すべての医師が関与する学会であり、年々その立場の重要性を増しております。循環器病対策推進基本計画も策定され、今後は国民の心臓血管外科領域への期待は更に高まり、それに応えるべく、学術総会での成果を国民に還元すべく活動して行くことがますます重要になると考えられます。そのような背景の中で、今回の学術総会のテーマは「BEYOND THE BOUNDS」としました。領域を越え、限界を越え、現状に留まる事なく考え行動して次の時代に進んで行こう、と言う思いを託しました。例年、2500名を超える医師に加えて、多数の医療関係者が参加する学術総会では、多くの発表と活発な討論が行われております。本総会でも多数の叡智を結集し、交流と学びの場を提供し、次の時代を見据えた心に残る学術総会とするべく構想を練っております。

一方で、新型コロナ感染症は依然として国民生活を脅かし、来年の本総会への影響も懸念されますが、新たな生活様式に基づいた総会運営も重要な課題です。オンサイト開催のメリット、WEB配信のメリットの両方を活かした新しい形での学術総会を視野に入れて計画中であります。実り多い学術総会となりますように最善を尽くす所存でございますので刀林会の諸先生方には、なにとぞご支援を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。末筆ながら皆様のますますのご健勝とご活躍を祈念申し上げます。

第35回日本内視鏡外科学会総会会長を拝命して

藤田医科大学医学部
先端ロボット・内視鏡手術学講座
宇山　一朗（64回相当）

このたび、第35回日本内視鏡外科学会総会を２０２２年12月８日（木）～10日（土）の３日間、ポートメッセなごやにて開催させていただくこととなりました。

テーマを「ハードルを踏み倒して進め！Create disruptive innovation!」といたしました。ハードル競技は、すべて倒して前に進んでゴールしても反則ではありません。ハードル＝既存の価値、既存の技術ととらえ、どんなに高いハードルでもDisruptive innovation（革新的価値）を創造するために超えていこうという思いを込めました。

日本内視鏡外科学会は「内視鏡外科手術に関する研究、教育およびその普及、発展に努め、会員相互の連絡、ならびに関連機関との連絡を図り、もって国民の福祉の増進に寄与することを目的」として設立された学術団体です。

本学会総会では一般・消化器外科、泌尿器科、産科、婦人科、呼吸器外科、整形外科、小児外科などの複数の診療科が集い、日々の臨床上で培った研究成果発表と活発な議論、手術手技向上を目的とした教育講演を経て、領域横断的かつ次なる内視鏡外科手術の安全な普及と発展へと導きます。

今では会員数１５，０００弱におよび、第２代理事長に故北島政樹先生(45回)が、そして第３代理事長に渡邊昌彦先生（58回）がつとめてこられ、わが国における内視鏡外科学の指導的役割が引き継がれています。

学術団体の最も重要な事業の一つとされる学術総会の開催は、研究会時代より刀林会の先輩方が主催されることが多く、１９９２年に第３回研究会を掛川輝夫先生（33回）、１９９３年に第５回研究会を比企能樹先生（37回）が開催されました。１９９５年に学会へ改称後は１９９６年に第９回総会を故北島政樹先生、１９９８年に第11回総会を故成毛韶夫先生（37回）、２０１０年に第23回総会を森川康英先生（49回）、２０１２年に第25回総会を松本純夫先生（52回）、２０１４年に第27回総会を若林剛先生（61回）、２０１６年に第29回総会を渡邊昌彦先生、そして、２０２０年に第32回総会を小澤壮治先生（60回）が主催されました。私は10人目の総会会長となります。このように刀林会の先生方との繋がりの深い学会の総会会長を拝命し、たいへん名誉なことと誇りに思う一方で、その重責に身が引き締まります。

小生が卒後７年目だった１９９１年に、故大上正裕先生の指導の下、当時の勤務地であった練馬総合病院にて腹腔鏡下胆嚢摘出術を開始して以来、「患者さんに優しい傷の小さい手術」をいかにして悪性疾患に導入し、さらに進行癌に対して適応拡大していくため、北島政樹先生を筆頭に、渡邊昌彦先生、故大谷吉秀、小澤壮治先生、若林剛先生、杉岡篤先生（61回）らの多くの先輩のご指導下に修練を積み、ロボット手術導入などの多くのハードルを踏み倒して来ました。北島政樹先生には、「内視鏡外科手術の奴隷になりなさい」という教訓をいただきました。これからも、多くの先輩、同僚、後輩に支えられながら、北島先生の教えに応えられるように尽力していく所存です。

歴代の先輩方より受け継いだ伝統を大切に、先進的な学会総会にするよう全力を尽しますので、刀林会の先生方におかれましては、引き続きご指導ご鞭撻賜りますよう切にお願い申し上げます。

第18回日本消化器外科学会大会（JDDW 2020）を終えて

前東海大学医学部
消化器外科領域主任教授
小澤　壮治（60回）

２０２０年11月５日～７日に神戸コンベンションセンターにて第18回日本消化器外科学会大会（JDDW 2020）を開催いたしました。開催にあたり、刀林会の皆様に温かいご支援を賜りましたことを心より御礼申し上げます。昨今の新型コロナウイルス感染症拡大により、一時、開催自体が危ぶまれましたが、国内最大級のハイブリッド開催形式の学術集会となりました。誰もが経験したことのない厳しい状況の中を無事に成功裡に終えることができたことに改めて感謝申し上げます。

本会は北川雄光先生（65回）が日本消化器外科学会理事長にご就任されてから初めて開催された学術集会であり、定年退職を控えた私にとって最後の主催学会でしたので、たいへん感慨深いものでした。

JDDW は日本消化器外科学会と日本消化器病学会、日本消化器内視鏡学会、日本肝臓学会、日本消化器がん検診学会の５学会が一同に介して開催する学術集会です。JDDW 理事長を始め、学術委員会委員長や財務委員会委員長、そして各学会の会長・準備委員長・事務局秘書が学会事務局に集まり、プログラム企画立案から応募演題の採否、会長賞や優秀演題などの賞の選定、スポンサー企業の募集などについて話し合いを行います。JDDW が規定する主題プログラムと日本消化器外科学会が規定する主題プログラムの定義が異なるため、他学会のセッションテーマとのバランスを図りながらプログラム編成を行ったことや、司会・演者について他学会との重複を避けるなど、主催校単独開催とは勝手が違ったことに苦労しました。

また昨今、主要学会で提唱されている演題登録のための条件である「倫理審査」について、JDDW では複数名の査読委員により査読が行われますが、その際に「倫理審査」の有無が必ず確認され、さらに各学会の倫理委員会委員長による確認も行われるなど十分な審査を経る独特なシステムが採用されています。今回、刀林会の先生方の中で、演題の採用のみならず、優秀演題賞を受賞された先生がいらっしゃいますが、各々の研究成果が客観的な高評価を得られたものと大変嬉しく思いました。

JDDW 2020 の一体感を維持しながらも、第18回日本消化器外科学会大会の存在感を示したいと考え、まずは演題募集について日本消化器外科学会事務局にもご協力いただき、メールマガジンの配信サービスを用いて会員への積極的な演題登録をお願いしました。北川先生、田邊稔先生(64回)、そして竹内裕也先生(71回)など同学会役員の先生の強力なお力添えもあって、関係のご施設から多数演題をご応募いただき、お陰様で一般演題では８８８演題が集まり５学会の中で最多演題数となりました。

本会で先生方の親睦を図る新しい試みとしてWebによる拡大プログラム委員会を開催いたしました。企画当初は実際に開催できるか不安でしたが、大きな通信障害もなく、ご参加いただいた先生方からは「久しぶりに皆さんとお話しできて楽しかった」と感想をお寄せいただき、安堵したことを覚えています。

企画の中で特に力を入れた特別講演では、安藤暢敏先生（50回）に山口俊晴先生によるご講演「消化器外科手術料の決定プロセスの現状と問題点」のご司会の労を賜りました。また渡邊昌彦先生（58回）のご司会のもと古川俊治先生(66回)に「これからの消化器外科診療」についてご講演いただきました。いずれの先生もわざわざ神戸までお越しいただき、感謝の気持ちで胸がいっぱいになりました。そして私が万難を排して準備した会長講演の司会を、病院長業務や公務等で激務が続く北川先生が「学会会場」でお務めくださったのは、何にも代え難い大切な思い出となりました。皆々様の温かいご支援にこの場を借りて心より御礼申し上げます。

JDDW 2020 の準備から終了までの間、５学会の会長、準備委員長、そして事務局秘書の皆様と志を共有し、お人柄に多々救われたことで、この困難な状況を乗り切ることができました。特に準備委員長を始めとする東海大学の教室員が日常臨床の忙しい合間をぬって、プログラム編成やイベントの企画立案、他学会やスポンサー企業との交渉、そして会期中の医局内の業務の調整など、あらゆる場面で活躍してくれ、感謝の念に堪えません。

最後に、新型コロナウイルス感染拡大の影響で各施設ご事情がある中で、神戸までお越しくださった先生、またWebでのご視聴くださった先生方に、改めて御礼申し上げ、学会報告とさせていただきます。

第75回日本大腸肛門病学会学術集会を終えて

宮島　伸宜（61回）

令和２年11月13日（金）、14日（土）に第75回日本大腸肛門病学会学術集会を開催させて頂きました。歴史ある日本大腸肛門病学会の学術集会会長を務めさせていただくことは望外の名誉であり、さらには刀林会の先生方には多大なご寄付とご協力を賜りましたことを心より御礼申し上げます。新型コロナウイルス感染症の蔓延のためWebでの開催を余儀なくされました。本来ならば新築間もないパシフィコ横浜ノースでの開催を予定しておりました。現地開催やハイブリッド開催の可能性を直前まで模索いたしましたが感染が収束に向かう気配がみられなかったため、残念ながら断念せざるをえませんでした。

テーマは「挑戦と検証：Challenge and Inspection」といたしました。内容は特別講演１、招聘講演５、教育講演３、特別企画１、シンポジウム５、パネルディスカッション９、ワークショップ９、日本韓国合同シンポジウム、要望演題、一般演題、ポスターセッションという構成でした。特別講演は神奈川県知事の黒岩祐治氏に新型コロナウイルス感染症の現状と対策についてお話しいただきました。本来ならば海外からの参加者も多く、ヨーロッパ大腸肛門病学会との交流を行っておりましたが、中止と致しました。

Web開催にもかかわらず、２２７５名と例年よりはやや減少しましたが多くの先生方にご参加を頂いたことは本当に嬉しいことでした。また、海外からは６カ国、10名の先生がWebにてご参加下さいました。大きなトラブルもなく終了できたことは皆様方のご助力の賜物と感謝申し上げます。また、本会は一部を藤田医科大学の前田耕太郎先生が会長である国際大学結腸直腸会議（ISUCRS）と合同開催と致しました。ISUCRSはハイブリッドで開催され、合同セッションも活発な議論が交わされました。会期終了後は12月１日から12月27日までオンデマンド配信を行い一人でも多くの先生方が視聴できるような体制を取らせていただきました。

刀林会の先生方のおかげをもちまして学術集会を何とか成功裏に開催することができました。今後は大腸肛門病学の発展のため微力ではございますが全力で取り組んで参りたいと考えております。

最後になり恐縮ですが、先生方の益々のご発展を祈念申し上げ学術集会終了のご報告と御礼とさせていただきます。本当にありがとうございました。

第75回日本大腸肛門病学会学術集会
収支報告書・決算書

（単位：円）

収入の部		支出の部	
参加費収入	27,067,000	会場費	16,177,105
本部準備金収入	3,000,000	会場設営費 ※業務委託費に含む	0
寄附金収入	10,733,605	機器関係費 ※業務委託費に含む	0
助成金収入（横浜市）	10,000,000	印刷製本費	990,000
抄録集販売収入	0	会議費	105,300
広告料収入	1,166,000	旅費交通費	1,028,835
関連行事開催収入	0	諸謝金 ※業務委託費に含む	0
商業展示収入	2,970,000	人件費 ※業務委託費に含む	0
書籍展示収入	0	関連行事開催費	3,210,636
共催セミナー収入	47,300,000	表彰関係費	0
各種会議費用本部負担金	0	通信運搬費 ※業務委託費に含む	0
雑収入	0	備品・消耗品費 ※業務委託費に含む	0
		広告宣伝費	0
		システム構築・運営費 ※業務委託費に含む	0
		業務委託費	43,142,264
		会計顧問料	0
		租税公課（納税準備金）	10,054,000
		雑費	3,960
		ISUCRSと共同開催に伴う分担金	4,237,500
		本部準備金返金	3,000,000
		本部繰入金支出	20,287,005
合計	102,236,605	合計	102,236,605

第75回日本大腸肛門病学会学術集会
会長　宮島　伸宜

第58回日本小児外科学会学術集会を終えて

慶應義塾大学医学部外科（小児）教授
黒田　達夫（61回）

本年４月28日から30日まで、横浜みなとみらいのパシフィコ横浜ノースを会場として、ハイブリッド形式により第58回日本小児外科学会学術集会を主催させて頂きました。学術集会の開催にあたりましては刀林会の皆様からの多大なお力添えを頂き、成功裏に開催できたことをご報告するとともに、心からの御礼を申し上げます。

今回の学術集会は、新型コロナウィルス感染第４波の拡大で、隣接する東京都には緊急事態宣言が発出されている中での開催になりました。直前まで開催の是非さえも不透明な状況でしたが、万一、行政からの要請が出た場合にはいつでも会場参加を停止できるように、会場数を絞り、各会場での参加を抑制して、webによる参加を主体にした開催を準備致しました。それでもコロナ禍の状況下においても通常と変わりなく学術集会を開催したいという学会員の強い思いに後押しされて、応募演題数は６００題を越え、参加登録者数は約１，１００名となり、日本小児外科学会としてはこれまでで最も規模の大きな開催となりました。また、コロナ禍の影響で昨年度は実施できなかった卒後教育セミナーを復活させて、多くの若い小児外科医が参加して会期翌日の５月１日までセミナーを行うことも出来ました。学術集会における議論もオンライン技術を用いて活発に行われ、アメリカ、タイ、ベトナムなどと繋いで、腸管再生医療の最前線やアジアにおける国際協力の有り方などについて国を超えて熱心な討議が行われました。さらに重症心身障害児など医療を要する子どもに対する行政、在野の活動について、厚生労働省の担当官の方にも加わって頂いて、議論を行う事が出来ました。こうしたセッションの記録は、本学会では初めての試みとして、５月末までweb上でアーカイブとして公開し、会期以降も新たな参加登録も受け付けて、より多くの視聴者と情報共有が出来るようにしました。

危機的な状況下ではありましたが、色々な技術の活用により、新しい学術集会の在り方として、今後の流れに一石を投じた学会開催が出来たのではないかと思っております。その一方で、同じ会場に立ち、お互いの顔を直接見ながら話をすることの歓び、大切さも強く感じました。新型コロナウィルス感染が一日も早く収束し、以前のような生活が戻ってくることを改めて切望してやみません。

第27回 日本血液代替物学会年次大会を終えて

埼玉医科大学総合医療センター
呼吸器外科　教授
河野　光智（72回）

２０２０年12月３～４日の２日間にわたり、日本血液代替物学会年次大会を開催いたしました。本学会は輸血に代わる血液代替物、いわゆる人工赤血球や人工血小板などの開発研究を推進するための学会です。小林紘一慶應義塾大学名誉教授が中心となられて設立され、年次大会は２７回目となりました。また呼吸器外科の諸先輩方がその開発に携わった日本初の人工赤血球、ヘモグロビン小胞体(hemoglobin vesicle) の第１相臨床試験が同年10月に始まり、記念すべき年の大会となりました。

本学会は新型コロナウイルスパンデミックのためオンライン開催といたしました。新型コロナウイルス蔓延の影響は多岐にわたりますが、輸血事業にも及んでいます。献血不足の事態が、大規模災害や今後の少子高齢化社会などで生じることは予測されていましたが、このような感染症の流行でも血液の不足が生じ、医療が成り立たなくなる事態が迫ることを、我々は強く認識しました。テーマを「現在そして未来の重大危機に対し、備蓄可能な血液代替物の実用化を！」とし、新しい人工赤血球・人工血小板の開発、またその臨床応用を目指す演題が理工系や医薬系の研究者から多数寄せられ、活発な討論がなされました。

私が所属した東海大学呼吸器外科は６演題を発表しました。このうち３演題は、外科手術での大量出血に対するヘモグロビン小胞体投与の臨床応用を目指した研究で、AMED の支援も受けています。ヘモグロビン小胞体は、期限切れ輸血用赤血球からヘモグロビンを抽出精製し、リポソームに内包した径２５０㎚の微粒子です。血液型に関係なく使用でき、感染のおそれがなく、２年以上の備蓄が可能であり、救急医療や大規模災害時、或いは離島やへき地での使用が見込まれています。我々は外科手術中の大量出血に対しても遅滞なく投与出来ると考え、臨床応用を目指しています。今回はイヌ肺切除モデルでヘモグロビン小胞体を投与し、酸素運搬の変化を詳しく解析して発表しました。さらに、最新の人工赤血球である修飾ヘモグロビンの有効性と安全性を評価した研究結果を中央大学理工学部の研究室から当科に派遣されている大学院生３名が発表し、人工血小板の有効性を人工心肺動物モデルで評価した成果を防衛医科大学校心臓血管外科講師石田治先生が発表されました。

コロナウイルスパンデミックのもと、研究の中断や延期を余儀なくされたとの声も聞かれましたが、参加者たちは得た研究結果を発表し合い、オンラインでの討論を通じて情報を交換し、刺激しあってさらに研究意欲を高めることができました。今後ますます血液代替物の重要性が増してくるであろう中、臨床応用が可能になり世の中の役に立つことと、パンデミックが終息にむかうことを願いつつ、閉会いたしました。

病院紹介

市立川崎病院外科の現在

病院長
金井　歳雄（59回）

金井は平塚市民病院から異動し、２０１９年４月より病院長を務めております。神奈川県慶応関連病院外科研究会（４Ｋ会）会長の立場をベースに日本外科学会代議員も務めさせていただいております。神奈川県臨床外科医学会では副会長に指名され、４Ｋ会の仲間にも積極的に参画していただいています。

心臓血管外科では井上慎也部長（77）を中心にステントグラフト、バイパス手術を行っていますが、４月より中間麻矢子医師（Ｄ４）を派遣いただきパワーアップいたしました。

呼吸器外科では、澤藤誠部長（67）が４月より副院長となり、岩丸有史（74）が担当部長として赴任しました。肺がん診療では例年約90例の切除をこなしており、県内有数の施設になっております。胸腔鏡手術が主流となってきており、井澤菜緒子担当部長（82相）、奥井将之医長（85相）と共に、ますますの発展が期待されます。

外科では、市東昌也部長（67）が４月よりがん集学的治療センター長兼務となり、全病院的がん診療の強化を担います。肝胆膵外科は、三原規奨医長（84、高度技能専門医）と雨宮隆介医師（88）を中心に高度技能指導医２名(金井、相浦)、名誉指導医(市東)がサポートする体制で、例年高難度手術約50例を行い、高度技能専門医修錬施設Ｂとなっています。相浦浩一内視鏡センター所長（63）は年間約２００件の ERCP, EST 等を行っています。食道・胃外科では中村哲也医長（79相）がロボット手術担当としてダビンチ胃切除術を計画しております。今春、菊池勇次医師の交代で小倉正治医長（81）が赴任しました。大腸・肛門外科は今春、山高謙医師が退職し、近藤崇之医長（88）の一人体制になりました。昨年度は１１０例を超える結腸直腸手術をこなし、その90％は腹腔鏡手術になっています。血管外科では、和多田晋部長（79）のもとに細川恭佑副医長（93相）が加わりステントグラフトなどでの活躍が期待されています。乳腺外科萬谷京子部長（74相）は丁寧な診療と手術時間・時間外勤務縮減の両立に努力してくれています。専攻医は、木戸美織（Ｄ７、金沢医大）、横塚彗（Ｄ７、東京医大）、鳴瀬祥（Ｄ４、帝京大）、海ケ倉紀文（Ｄ３、慶大）の布陣です。今年度から、当院も外科領域専門研修の基幹施設になりましたが、残念ながら申請はありませんでした。昨年７月より、〝腹急ホットライン〟を近隣医療機関向けに設置して、急性腹症の受入強化を行っています。

川崎病院は公立の感染症指定医療機関であり、COVID-19と正面から戦っておりますが、一方で、一般診療も従前のアクティビティを下げることなく実施しています。術前は全例、LAMP 検査を行い、万全な感染管理下に手術をこなしております。今後とも、川崎病院外科をよろしくお願いいたします。

病院紹介

恩賜財団　済生会横浜市東部病院

病院長　三角　隆彦（60回）

早いもので当院が開院して15年目を迎えました。私が初代院長・川城丈夫先生：内科45回の後を継いで丁度10年が経過しました。当院は刀林会関連病院の中でも歴史と伝統を有する済生会神奈川県病院（当時院長：故吉井　宏：53回、現院長　長島　敦：64回相当）の急性期部門を移転し、２００７年３月30日、横浜市鶴見区に開院しました。第２京浜国道（国道１号）と鶴見川が交差する新鶴見橋沿いに位置し、隣接する市営の公園の桜が毎年春に新入職員を迎えます。

病床数は一般病床４６８、精神病床50、重症心身障害児（者）施設（サルビア）44の計５６２床で、開院時に比べ地域の医療需要の増加に伴い一般病床を８床増床しました。病院全体の診療機能の特色として、１．がん、心疾患、脳血管疾患等を中心とした高度で専門的な医療の提供　２．疾患別センター方式による、職種や診療科の枠を超えたチーム医療の提供　３．病診・病々連携をはじめ、介護・福祉等の分野を含めた幅広い地域医療連携への取り組みを挙げ、政策的医療とし、１．救命救急医療（三次救急）、２．24時間３６５日対応の二次救急医療、３．小児救急医療、４．精神救急医療および精神科合併症医療、５．災害時医療を担い、これまで着実に実行してきました。

開院当時からの病院理念のもと、〝常に一歩先の医療〟を目指しており、私が院長就任以降も、放射線治療機器サイバーナイフ、daVinci、TAVI等の先進的技術をいち早く導入し、ICTを用いた地域医療介護連携システム（サルビアねっと）を開始するなど、地域医療に貢献する事はもちろん、当院に勤務する職員がやりたい事をできる様に応援しようという思いで運営してまいりました。

現在、常勤医師数は研修医を含め約２６０名で、開院当時の約１５０名から１．７倍以上に増加しました。現在在職中の刀林会メンバー（医員以上）は、【一般消化器外科】江川智久副院長（74相当）、西谷　慎医長（84相当）、西山　亮医長（84相当）、山田　暢医長（87）、今井俊一医長（89）、下河原達也医長（89）、青山純也（92）、【緩和ケア内科】奥澤星二郎部長（57）、【呼吸器外科】酒井章次サルビア施設長（57）、青木輝浩院長補佐（64相当）、井上芳正部長（75）、田中浩登医長（90相当）、【脳神経外科】稲葉　真部長（69）、各務　宏部長（70）、峯裕副部長（75）、【心臓血管外科】三角隆彦、飯田泰功部長（81相当）、稲葉　祐医長（90相当）、岡　英俊（91相当）、蜂谷　貴顧問（62相当）で、それ以外にも、当院出身の多くの刀林会メンバーが各地で活躍しています。

留学報告

清水　隆弘（88回）

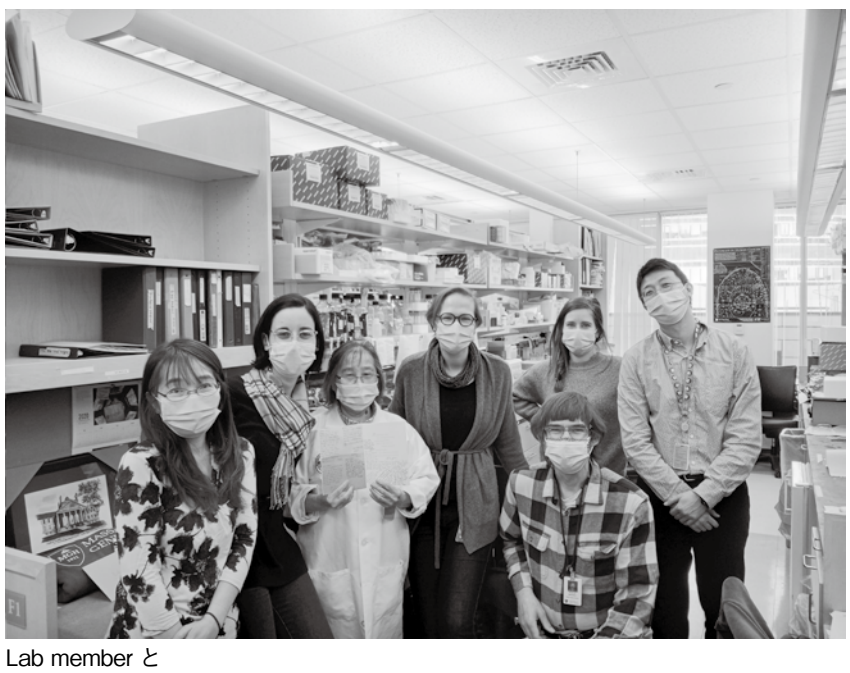
私は、２０２０年６月から米国Bostonの Massachusetts General Hospital (MGH)、the Division of Pediatric Surgery所属のresearch fellowとしてPediatric Surgical Research Laboratoriesで基礎研究に従事しております。

Pediatric Surgical Research Laboratoriesは、小児外科医のDr. Patricia K. Donahoeが１９７３年に立ち上げた伝統ある研究室で、〝Laboratories〟と複数形ですが、その名の通り、先天性横隔膜ヘルニア（CDH）に関する研究を行うCDHグループ、ヒルシュスプルング病などの腸管運動不全に関する研究を行う腸管グループ、MISに関する研究を行うMISグループの、３つの研究グループから成り、我々外科学教室とは１９７４年に伊藤泰雄先生が留学されて以来実に半世紀近くの交流があります。

私が所属するMISグループは、MISを研究室内で独自に精製し、これまで卵巣を中心とした生殖器に対するMISの機能解析などの基礎研究を主に行ってきましたが、現在では卵巣癌治療へのMISの応用や猫の妊孕性への介入研究、などMISに関連する基礎研究だけでなく同時にいくつものtranslational researchを他施設と共同で行っています。私は、発生および生殖生理学を専門とするDavid Pepin Ph.D.の指導の下、同グループ内の他４人のresearch fellowと切磋琢磨しながら、副腎におけるMISおよびMIS受容体Ⅱ（MISRⅡ）の基礎研究に従事しています。Pediatric Surgical Research Laboratories内の人材は国際色豊かで、米国のみならず様々な文化背景の人々と交流でき、自身の背景とのギャップに戸惑うこともありますが、日本国内では経験できないような貴重な経験が得られています。

また現在も毎日通勤され、Pediatric Surgical Research Laboratories全体をorganizeされているDr. Patricia K. Donahoeは生殖器の分化に重要なMISを初めて報告した一人として世界的に有名ですが、最も成功した女性のPediatric academic surgeonとしてロールモデルになる素晴らしい指導者です。彼女ような高名なAcademic surgeonに師事することができるというのは大変名誉であると同時に、私の外科医人生にとって非常に重要なことだと感じております。渡米して早1年近く経過しましたが、残りの留学期間もなるべく多くのことを貪欲に学びたいと考えております。

Massachusetts州内のコロナ感染状況は米国内のワクチン接種の普及に従って好転し州内の様々な制限が解除されるのも目前という状況になりましたが、日本国内はまだまだ医療の危機的状況が続いていると伺っております。そのような危機的状況下にあっても、留学に際しご高配・ご指導いただき留学後も様々なご支援を賜りまして、黒田達夫教授ならびに刀林会の諸先輩方には深く々々感謝する次第です。



Lab member と

帰室報告

平塚市民病院
菊池　弘人（86回）

私は２０１８年４月より２０２１年３月まで、米国ボストンのマサチューセッツ総合病院放射線腫瘍学、Edwin L. Steele Laboratories へ研究留学をさせていただきました。大変貴重な機会をいただきましたことを、北川雄光教授、長谷川博俊先生、岡林剛史先生、ならびに刀林会の諸先生方に深く感謝を申し上げます。

留学先の研究室は Rakesh Jain 教授のもとに８人の PI がおり、メンバーは総勢50名以上という大所帯です。多額の研究費を長期に渡り獲得しており、これまで在籍したフェローは３００人にもなります。現在ボストン三四会の会長をされている福村大先生（68回生、消化器内科）も PI の一人です。私の直接の指導者である Dr.Duda は消化器癌に対するトランスレーショナルリサーチの責任者です。これまで一般・消化器外科より落合大樹先生、星野好則先生、茂田浩平先生、呼吸器外科より羽藤泰先生が留学され、慶應とのつながりを非常に大切にされています。

研究室としてはこれまで、癌のもつ異常血管を研究テーマのひとつとしてきました。癌の異常血管は、腫瘍内の低酸素や免疫細胞の抑制などをもたらし、治療抵抗性の一因であるとされます。抗血管新生治療により腫瘍血管を正常化し、これに伴い腫瘍免疫も改善し、治療に有利な環境を整えることができるということを示してきました。

私の研究テーマは腫瘍微小環境の改善による腫瘍免疫の賦活であり、主に肝細胞癌を対象とし、血管新生治療に免疫チェックポイント阻害剤を組み合わせた治療法について検討致しました。この併用療法は現在様々な癌でシナジー効果が報告され、実臨床で使用されています。メカニズムについては不明な点も多く、この分野でのトランスレーショナルリサーチが担う役割は大きいと考えます。昨年にはその一端を報告することができました。

基礎研究以外にも臨床研究への関与や講演会など、多くの機会がありました。２０２０年３月にコロナが拡大してからは、残念ながらラボの閉鎖をはじめ、多くの制限がありましたが、アメリカという国、ボストンという都市、またその中核病院である MGH が緊急事態にどのように対処していくか、人々がどのように応じていくかを肌で感じられたことは貴重な経験でした。

今後は経験させていただいたことを少しでも慶應義塾や社会に還元できるよう、頑張って参りたいと思います。引き続きご指導・ご鞭撻をどうぞ宜しくお願い致します。

帰室報告

東海大学医学部肝胆膵外科
永　滋教（86回）

外科学（一般・消化器）永　滋教と申します。私は２０１５年に肝胆膵・移植班の初代がんプロフェッショナル養成プラン臨床大学院生として田邉稔先生、日比泰造先生のご指導のもと博士課程を修了するとともにチーフレジデントを終えました。その後、ポストチーフ出張として永寿総合病院に勤務し愛甲聡先生、板野理先生をはじめとした先輩方に外科手術の基本のいろはを徹底的に叩き込んでいただき、北里大学病院に異動となったのちは隈元雄介先生のご指導のもと肝胆膵外科高度技能専門医および内視鏡外科技術認定医（肝臓）を取得させていただきました。このように外科医として充実した臨床・手術の修練をさせていただいたのち、２０１９年４月よりドイツのハイデルベルク大学一般・消化器・移植外科で研究留学をする機会を与えていただきました。

私が所属したハイデルベルク大学外科は Markus W. Büchler 教授、Thilo Hackert 教授のもと年間７００件を超える膵切除を行っている世界有数のハイボリューム膵臓外科施設であります。私はここで手術に参加させていただき世界を牽引する手術手技をその眼に焼き付け多くの学びを吸収することができました。また同時に当施設の膨大な手術データベースをもとに膵臓腫瘍の低侵襲手術に関する臨床研究に従事させていただきました。一方で、European Study Group for Pancreatic Cancer（ESPAC）の Chairman である John P. Neoptolemos 教授のもと膵臓癌のエピジェネティクス分野におけるサブタイプ解析および腫瘍クラススイッチをテーマとした基礎研究プロジェクトを任せていただき、世界から集まった同僚たちとともに様々な知見を得る機会を頂きました。

仕事の合間にはヨーロッパ各国の息をのむような美しい世界遺産や雄大な自然などに存分に触れ、私の中の世界観および人生観に大いなる変革をもたらすこととなり、人間的に一回り成長することができました。「世界は広い。が、近い」ということを身に染みて実感致しました。

帰国後は２０２１年４月より東海大学病院肝胆膵外科に赴任させていただいております。当院の肝胆膵外科はまだ腹腔鏡下手術が積極的に取り入れられていない状況ではありますが、下部消化管外科の山本聖一郎先生・上部消化管外科の小柳和夫先生のご協力のもと、今まで培ってきた臨床経験を存分に活かして、当科への低侵襲手術の導入および活性化のために粉骨砕身の想いで尽力していく所存です。

最後になりましたが、このような大変貴重な留学の機会を与えて下さった北川雄光教授ならびに慶應義塾大学医学部外科学教室、刀林会の諸先生方に心より御礼申し上げます。今後は刀林会の名に恥じぬように研鑽に努めていくとともに、後輩の先生方の模範となるべく精進してまいりますので、今後ともご指導ご鞭撻のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

帰室報告

留学を終えて

栃木医療センター
吉川　祐輔（88回）

私は２０１９年４月より２０２１年１月までシンガポールの国立研究機関である Agency of Science, Technology, and Research（A*STAR）に留学させていただきました。シンガポールは東南アジアに位置する人口６００万人程度、東京23区と同程度の面積と規模は小さいものの、建国からわずか50年あまりで著明な発展を遂げた経済的に非常に裕福な国家としても知られています。その背景には外国人・外資を積極的に誘致、利用していることが挙げられます。私の上司であった Nick Barker 氏をはじめ、A*STAR にも世界中から高名な研究者が数多くリクルートされており、非常に高いレベルの基礎研究に没頭することができました。同様に、若手研究者も世界中の国・地域から集まってきており、様々な国籍・人種の同僚や友人にも恵まれ、多くの刺激を受けることができました。また、シンガポール自体も中華系・インド系・マレー系からなる多民族国家であり、様々な文化の混在した街並みのなかで家族とともに過ごせた時間は心に残る思い出となっています。

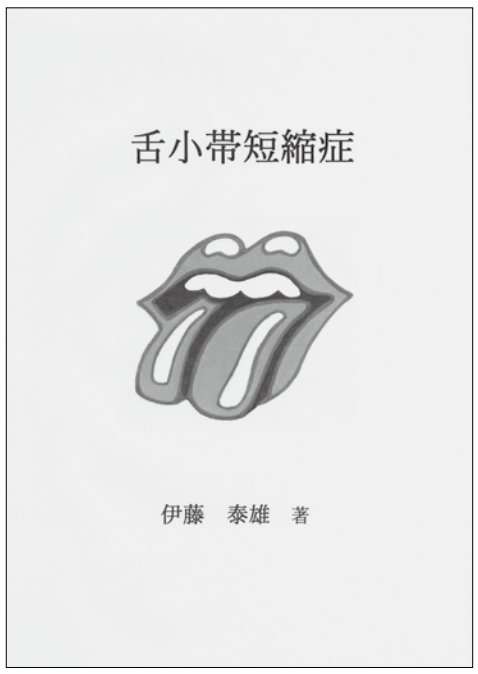
研究室の同僚と

一方で、在任期間中にCOVID19 パンデミックを経験することにもなりました。シンガポールは強権国家としても知られていますが、コロナ禍における日常生活の制限も日々めまぐるしく更新され、かつ実刑を伴う厳しいものでした。緊急事態における対応の違いを肌で感じることができたことはある意味で貴重な体験でもありましたが、平時には感じることのなかった在外邦人としての不安定な立場も実感させられることになりました。また、研究活動の制限を受けただけでなく、後任者の調整の関係で予定よりも早い時期の帰国となってしまったことも心残りとなっております。しかし、その一方で日々の状況に相談にのっていただき、サポートしてくださった外科学教室の先生方の温かさ、有難さを改めて実感しました。

想定外の事態にも多々直面した留学期間ではございましたが、いずれも他では得られない貴重な経験であり、自分自身の成長につながるものであったと確信しています。今後は、私が留学期間を通じて得たものを少しでも還元し、外科学教室に貢献できるように精進して参ります。末筆となりましたが、留学に際して格別の御高配を賜りました北川教授ならびに外科学教室刀林会の先生方に心より御礼申し上げます。

私の著書

「舌小帯短縮症」



伊藤　泰雄（47回）

この度、舌小帯短縮症の本をキンドルから電子出版しました。舌小帯短縮症の治療をめぐっては長い論争の歴史があります。

私が医師になった頃は、舌小帯切開は日常的に行われていました。しかし２００１年に日本小児科学会が「舌小帯と哺乳は関係ない」と報告して以来、日本では舌小帯切開はほとんど行われなくなりました。

私は２００９年、杏林大学小児外科を定年退職し、国際医療福祉大学熱海病院の小児科に勤務することになりました。回診で哺乳が下手な新生児がいると、昔のように舌小帯を切っていました。ところが小児科の同僚から、「小児科学会が切る必要がないと言っているのになぜ切るのか」と批判され、本症に対する私の考えが小児科医と大きく隔たっていることに気づきました。

そこで国内外の論文を系統的に収集し、レビューを行いました。するとこの20年来、母乳栄養が推奨されている欧米では舌小帯切開を推奨する論文が多いことを知りました。レビュー結果は日本小児科学会の邦文誌と英文誌に総説として掲載されました。英文誌のレビューをきっかけに、海外の研究者とも交流が広がり、私の舌小帯切開の方法も少しずつ変化しました。

第１に、エコー検査で哺乳時には舌の前方のみならず後方部分の動きも重要であることが明らかになった結果、舌小帯を舌根部まで十分に切り込むようになりました。

第２に、術後に再癒着が起きると十分な改善が得られないことから、術後に創部のストレッチを導入しました。

また従来、手術に反対する人から、手術の適応基準がはっきりしないとの批判がありました。そこで私は既存の病型分類と重症度評価を改変し、手術の適応基準を明確化しました。これらの変遷を経て、今や舌小帯短縮症の治療方針は標準化された感があります。

現在、私は新百合ヶ丘総合病院小児科で舌小帯外来を担当していますが、他の医療機関を受診して「今は、舌小帯は切りません」と手術を断られた患者さんがＳＮＳや口コミで数多く来院しています。

しかし日本小児科学会が未だに治療指針の見直しを行っていない我が国では適切な治療を受けられない患者さんが全国に大勢います。この状況をこれ以上看過すべきではないとの思いから本書を上梓することにしました。

内容は、主として哺乳、摂食、発音などの口腔機能障害の診療に携わっている医師、歯科医師、助産師、言語聴覚士など医療従事者向けに書かれています。ご一読いただければ幸いです。

地域便り

青森県弘前市より

弘前大学医学部附属病院
小児外科　診療教授
平林　健（67回）

67回小児外科の平林です。

黒田達夫教授のご高配で、本州の最北端にある（おそらく刀林会関係の施設では最北端にある）弘前大学医学部付属病院小児外科に赴任して、はや５回目の春となりました。

青森県は非常に自然豊かな・雪深い（広くて人が少ない、即ち過疎）県です。その中で弘前大学のある弘前市は、古くからの城下町であり、風光明媚な落ち着いた（老人が多く、少子高齢化が進む）街です。言い換えると、過疎高齢少子化が非常に進む（日本全体より25年ほど先行しています）地域です。

少子高齢化が進む地域といっても小児外科医を欠くと新生児外科手術のみならず、ありふれた鼠径ヘルニア嵌頓例や腸重積整復不能例の対応が困難となり、地域の小児医療維持が難しくなり、子供が産めない育てられない地域となり、地域社会が滅びてしまう結果となるため、小児外科医の存在は、いかに少子高齢過疎県といっても不可欠と考えられます。

そのため、前任者の突然の逝去により私が赴任することになりましたが、現在の弘前大学医学部附属病院小児外科は、私と小児外科研修医１名（斎藤傑君：弘前大学・平成22年卒）が専任で消化器外科学・乳腺甲状腺外科学講座（袴田教授）から１乃至２名が応援に、加えて学生が１乃至２名が実習にきており、比較的賑やかな日々を送っています。

ようやく、弘前大学さらには青森県での小児外科医療は軌道に乗りつつあると考えられますが、しかし、未来の弘前大学さらには青森県の小児外科医養成には、本大学ならびに本県だけでは不十分と考えられます。そのため、現在、国際医療福祉大学の渕本教授（66回）と成育医療センターの藤野部長（75回）のご協力をいただき、弘前大学の小児外科医の研修をお願いしております。刀林会の皆様には、さらなる御援助をお願いするかと思います。

ところで、青森県は、大間のマグロ・陸奥湾のホタテ・八戸のサバ・鯵ヶ沢のヒラメ・津軽のリンゴなど海の幸・山の幸に恵まれ、さらに弘前には豊盃TMなどの美味しい日本酒も多くあります。是非、刀林会の皆様も、弘前まで是非お越しいただき、美味しい肴・お酒を楽しんでいただければと存じます。

今後とも、弘前大学医学部附属病院小児外科をよろしくお願い申し上げます。

弘前大学医学部消化器外科・乳腺甲状腺外科・小児外科講座のメンバーと（袴田教授以下）

桜の弘前城と岩木山

秋の収穫前のリンゴと岩木山

雪の弘前城

なでしこ外科医

東京都済生会中央病院
岩間　望（90回相当）

この度は「なでしこ外科医」への寄稿という貴重な機会を与えていただき、ありがとうございました。90回相当の岩間 望と申します。

私は北川教授の「女性外科医でも専門医を取り、家庭と両立出来る医局を目指している」という御考えに共感し、慶應の外科への入局を決めました。近年、女性外科医の割合が増えて参りましたが、私の代は私を含め女性外科医は２人でした。希望の腸班に所属させて頂き、大学院へいき、フリー学年２年目（医者７年目）に妊娠・出産をし、産後半年になる２０１８年４月よりチーフとして復帰させて頂きました。復帰後、育児との両立は想像していた以上にきつく、手術中に体調が悪くなり同期に代わってもらう事もありました。当時の同期の先生方、腸班の先生方をはじめ多くの先生方が全力でサポートして下さり、チーフを無事終了することが出来たと思います。この場をお借りして心より感謝申し上げます。

ポストチーフで荻窪病院に出向させて頂き、子育て可能な環境を整えて頂いた上で、消化器外科医としての経験を積ませて頂きました。大腸疾患のみならず、膵頭十二指腸切除術を完遂させて頂いたりと、多くの手術を執刀させて頂きました。

今年度より東京都済生会中央病院へ出向させて頂き、今夏二児の母となる予定です。妊娠してからの出向で不安もありましたが、快く受け入れて頂き、遠藤高志先生のもと大腸の手術を中心に多くの症例を執刀させて頂き、レジデントの指導をする機会も増え、今まで以上に色々と考え手術に臨んでいる毎日です。

母となってから、絶対的な時間の制約がある中で、仕事も育児も中途半端になっている様で悩むことも正直ありましたが、女性外科医で患者さんに喜ばれる事も多く、ポストチーフとなってからは患者さんに寄り添い、治療にあたれることに更にやりがいを感じるようになりました。男性医師と同様に働けない時期があったとしても、出来る限り努力を行い、患者さんが安心して頼れる外科医として日々研鑽し精進していこうと思っております。

また、実際子育てをしながら働いていて感じたのは本当に周囲に支えられ、仕事を続けられているということです。周囲の男性外科医の理解と大きな支えにより、子供の事も大切にしながら働ける環境が備えられていると日々実感すると共に、支えて下さっている先生方に深く感謝申し上げます。両親や夫の協力も無ければ、難しい局面もあり家族にも感謝しております。

今後とも周囲への感謝を忘れずに、外科医として日々の医療に邁進して参りたいと思います。そして、私自身も女性外科医のサポートが出来るように努力していく所存ですので、今後ともご指導のほど宜しくお願い致します。

なでしこ外科医

国立がん研究センター東病院
乳腺外科
綿貫　瑠璃奈（92回）

この度は刀林会新聞「なでしこ外科医」への寄稿の機会をいただき、どうもありがとうございます。92回の綿貫瑠璃奈と申します。

私は２０１５年に外科学教室に入局し、川崎市立井田病院、済生会宇都宮病院へ出向させていただき、多くの手術経験を積むと同時に、外科の基礎を学ぶことができました。特に入局時より乳腺外科医を志望していた私でございますが、出張中は全ての外科医の先生に一般・消化器外科領域の熱い指導を賜り、また一番大事な外科医としての姿勢を学び、今に生きております。２０１７年に帰室し、乳腺班に所属させていただき、臨床系の大学院であるがんプロフェッショナルコースにも入学させていただきました。がんプロフェッショナルコースとして慶應病院内で他癌種の診療を学ばせていただいたり、２０１９年には国立がん研究センター中央病院へ１年間出向の機会をいただき、乳腺外科だけでなく、腫瘍内科や乳腺病理など貴重な修練を積むことができました。私のレジデント生活はどの学年を振り返っても本当に充実した日々であり、この素晴らしい教育環境を提供してくださった外科学教室に心から感謝しております。そしてこの３月に大学でのチーフレジデントを卒業し、４月より国立がん研究センター東病院へ出向させていただきました。乳腺外科医としてがん専門病院で再び働かせていただく機会をいただき光栄であると共に、がん診療を極めるには申し分ない場を与えていただいたと思っております。３月までレジデントだった私が、突然スタッフと呼ばれる立場となり、戸惑いと不安が隠せませんが、温かい上司にご指導いただきながら、日々の臨床に取り組んでおります。私の医師としての目標は「女性の味方になれる外科医」であります。乳癌診療をしていて良かったと思うことは、若い私であっても女性医師で良かったと言っていただけることです。そういった患者さんの気持ちに応えられるよう責任感を持って診療にあたると同時に、女性らしい物腰の柔らかさや共感する気持ちを大事にしていきたいと思っております。また、患者さんの期待に応えるためにもますます手術手技の向上に努めなくてはならないと実感しております。

さて、私を育ててくれた素晴らしい女性外科医の先生達のおかげで、現在多くの女性医師が外科学教室に入局するようになりました。特に乳腺外科では私の後輩も女性ばかりとなってきており、そういった後輩に恥ずかしくない後ろ姿を見せられるよう研鑽を積み、さらには自分が受けてきた教育を後輩達へも還元できる存在になれるよう努力していく所存です。私が外科医を続けてこられたのは偉大な諸先輩方と深い理解を示し応援してくれている家族のおかげと思っております。改めて皆様に感謝し、その気持ちを忘れることなく精進してまいります。今後とも外科学教室の皆様には大変お世話になりますが、どうぞご指導のほど宜しくお願い申し上げます。

定年後の私

藤田医科大学名誉教授
総合新川橋病院
副院長・脳神経外科顧問
佐野　公俊（49回）

２０１０年藤田医科大学を定年退職した後、私の特技は手術しかないので全国に手術指導に行くことが私の使命であろうと思い、関東に３日間、東海で３日間の手術と外来を計画した。以来、月曜日火曜日は、川崎の総合新川橋病院で手術。水曜日の外来の後は、名古屋に戻り、木曜日は、名古屋市緑区のジャパン藤脳クリニックで外来、金曜日は長久手市の名古屋脳神経外科クリニックで外来、午後からは豊川市の青山病院で手術、土曜日は２ヶ月に一度名古屋徳州会の外来と手術指導。そして頼まれれば藤枝市の平成記念病院、太宰府市の島本脳神経外科で手術を行っている。手術はほとんどがクリッピング術で、たまにＡＶＭの摘出術も行っている。

また以前より英国ニューキャッスルの教授で退官のあと、母国インドのコルカタで自身の病院を建て、脳神経専門病院を経営しているロビンセングプタ教授に「自分より手術がうまかったのはヤサジル教授と佐野だけだったから自分の病院内に佐野動脈瘤手術学校を作ってほしい」と頼まれており、長期に滞在するのは不可能だが年に数回ほど行って手術のイメージをザイオで一緒に作りながら手術を見せて指導するような学校を２０１８年に立ち上げ、〝Sano & Sengupta Academy on Aneurysm Surgery〟と命名した。コロナのひろがる兆しの２０１９年の年末まで訪印していたがさすがに今は行ける様は状況下ではない。

コロナで国内の手術数は相当減少したが相変わらず名古屋、川崎、豊川には通っている。車での移動なので人との接触がかなり抑えられている。

動脈瘤のクリッピング術も４８００例を越え、あと２年以内に５０００例を越すかと思うが顕微鏡でまだ手が震えることもないので手術も続けられそうである。先生方には紹介患者さんだけでなく、いつでも手術見学を歓迎しているのでホームページの手術予定をご覧いただき、誰でも脳外科医が困難な症例も正確で合併症のない無血手術を覚えてもらえればと思っている。

それまで健康でいるために時間のある限りテニスをしているが何事も一度中断したらもう戻れない歳にきているので継続を怠らないように己に勝つことで日々を過ごして生きたいと考えている。

一日も早いワクチン接種者の増加によりコロナの沈静を望んでおり、以前のように穏やかな日々となることを願っております。

▽近況報告　49回生

中村　達（49回）

浜松医科大学を退職後早くも６年になる。学会等は自分の時間作りを目的にすべて御無沙汰することにした。しかし、仕事が完全にないとボケることが心配で、市立御前崎総合病院で顧問の非常勤職を得た。週２日間外科の手伝いをしている。手伝いと言っても、私のいた第二外科の若い医師達に差出がましく手術を教えているが、若い外科医は開腹手術を学ぶ機会が少ないようで、彼らに対し、大変役に立っていると自分は思い込んでいる。勤務がない日はウォーキング、庭の花壇の手入れ、蘭の世話、家庭菜園を熱心にやり、月１回蕎麦打ち教室、月２回遠州灘で船釣りなど沢山の趣味で忙しい。庭は花ざかりとなり、魚と野菜はほぼ自給自足となっている毎日である。

古屋　正人（49回）

１９７０年外科に入局し半世紀が経過しました。１９８０年に富山へ帰り父と一緒に古屋外科病院で消化器疾患の手術を行っていましたが、１９９３年に古屋医院としてリニューアルし現在に至っています。手術をしなくなった外科医は消化器疾患や生活習慣病の治療を行っていますが、富山県外科医会会長をしていた６年間には、年１回の特別講演に北島先生など刀林会会員の先生方に来て頂きました。また２０１２年７月に富山で開催された日本消化器外科学会に合わせて「刀林会in富山」を企画し掛川先生・比企先生はじめ27名の参加があり、最年少は北川教授でした。75歳後期高齢者になりましたが、患者さんからまだまだ元気で面倒見るように言われていますので、もう少し現役続ける所存です。

河瀬　斌（49回）

定年後は生きているうちに地球を余すところなく旅行しようと、コロナ禍が始まる直前の２０２０年冬、南米最南端パタゴニアでの山岳トレッキングと南極クルーズに行きました（写真）。地球を一周して横浜のクルーズ船騒ぎの最中、かろうじて帰国しましたが、それ以来海外には行っておりません。現在は非常勤として関連病院の手術指導、診療、オンラインで国際学会の講演をしたり、メールで友人の病気の相談を受けたり、大学の後輩の論文を修正したり、結構多忙です。息子家族は東京におりますので、正月はZoomで新年の挨拶をしました。普段は家内と共に二人で自宅の庭の植木屋を楽しんでいます。今年で結婚50周年になり、私も喜寿を迎え、息子達がお祝いの会食を企画中ですが、緊急事態宣言のためどうなることやら。オリンピックまでにワクチンが普及するのを待っています。

幕内　博康（49回）

警友総合病院から東海大学医学部付属病院へ移って早くも42年が過ぎようとしています。定年後11年、特任教授、顧問として医学部付属４病院の管理・運営に携わっています。最近は、経費削減、コロナ対応に力を注いでいて、なかなか大変です。新病院の建設計画、人事の刷新等進めていますが、先ず私が退かねばと考えています。現在も付属八王子病院の方で手術、内視鏡と臨床の方もお手伝いしています。

趣味の方は魚釣りと庭木の手入れでしょうか。釣りは慶大釣魚会にも属していましたが、今は海でアカムツ、マハタ、ヒラメなど高級後を狙っています。どうも魚屋へ行った方が早いようです。家内との散歩にも精を出しています。話し相手として妻の有り難さが身に染みるこの頃です。

森下　幹人（49回）

現在は隠居生活で老夫婦二人の暮らしです。

外科は10年弱で父が名古屋駅裏へ大移転時に失明して継ぐ事になり40年間胎盤注射治療のクリニックで盛業中でした。

昨年２月コロナ禍で人の往来が絶え９割減が続き５月末に閉院しました。

娘と息子夫婦（孫一人）は東京在住です。コロナ拡大でロータリー、高校同級生や三田会などの人の交流がままならず静かに過ごしています。

早くコロナが一段落して家族や友人達と気兼ねなく会って交流できる普通の暮らしを取り戻せる日を願っています。

読書、囲碁、中央競馬、散歩兼ねた買い出しなどが日常生活ですが後期高齢者となり持病も有るので無事是健康で日々過ごしています。

高見　博（49回）

私は２０１１年に帝京大学医学部外科主任教授退職後、名誉教授の傍ら、長らくご支援を戴いております伊藤病院（伊藤公一院長）にお世話になっております。進行甲状腺がんのゲノム医療・薬物療法の臨床研究に精を出し、内分泌・甲状腺外科という限られた学会ですが、特別講演・教育講演・共催セミナーなどにほぼ毎回講演させていただいております。また、実益を兼ねた「抗加齢医学」では小市民公開講座などで講演しております。趣味は無趣味で、運動音痴ですので、ウオーキングなどしかできません。幸い、現時点までは大きな病気をしていないのが唯一の救いです。最近、「さらに高みを目指して」（自費出版）、「健康長寿をつくる最新常識40」（麻布台出版社）を上梓しました。刀林会の皆様には手を差し伸べていただき、感謝の念に堪えません。塾外科の活躍を聞くと大変嬉しく思うこの頃です。

森川　康英（49回）

51歳で慶應に戻り、小児外科の新設を経て２０１１年３月に定年を迎へたのち、国際医療福祉大学病院小児外科教授として赴任しました。栃木県北で小児外科専門施設を立ち上げることと、将来の医学部新設に向かっての基盤づくりが私に課せられた仕事です。この二つのタスクはその後実現され、後輩を主任教授に迎えることができました。思えば診療科の新設と人集めに私の人生の殆どは関わっており、それぞれやりがいのあることであったと思います。並行して医療法人の院長の後任を委任されました。慶應から外科、整形外科、循環器内科、糖尿病内科のDrに応援に来てもらいながら病院経営に関わっています。COVID-19の医療従事者優先接種機関となり４月から毎日接種に追われていますが、毎月の月次報告を見ながら頭を悩ませる日々が続いています。

慶應在任中からの関係で現在も公的研究費の審査委員や小児がん支援のNPO法人の理事長も勤めています。

stay homeのなかで新しい自分の場所を見つけるために、昨年夏から毎週日曜日は私が料理を作り、娘、孫に振舞うことにしました。まだまだ肉を中心とした煮込み料理がメインですが、これもボケ防止を兼ねた一石三鳥であると思っています。

自身の活動量は昨年から20％ほど少なくなっていますが、定年後英信流の居合の稽古を範士（96歳）の方について始めて昇段を重ねています。最近三田弓友会（体育会弓術部の同窓会）の副会長としても活動しています。

宮崎　泰弘（49回）

故郷で診療所をはじめて32年以上が過ぎようとしています。２年前に有床診療所から無床診療所にしました。診療以外の仕事は徐々に辞めて現在は別府市の肺がん住民検診事業（読影も含め）の仕事のみとなっています。今はコロナ禍で昨年より発熱外来やワクチン接種の仕事が加わっています。

現在、長女と二人で診療を行っています。今後も当分スタッフや長女の協力を得ながら出来る範囲で診療を続けようと思っています。

妻と歩きを兼ねた近場のドライブ（たまにですが）や週２回程度のゴルフ練習、週１回程度のゴルフラウンド（昨年秋に偶然「エイジシュート」をしました。）で運動を兼ねて楽しんでいます。

３人の子供と５人の孫（４歳～16歳）がいるのですが、偶然３人の子供が勤務の関係で近辺に住んでおり、週末は孫が遊びに集まる事が多くこれも現在の楽しみの一つになっています。

早くこの感染症が終息し、クラス会が再開出来ることを祈っています。

追悼

阿部令彦君（30回）を偲んで

吉野　肇一（44回）

１９７３年より１９９１年の18年間、慶大外科教授（一般・消化器外科）を務められた阿部令彦 名誉教授は２０２１年３月７日に95年の生涯を閉じられました。

その間、私は、彼が教室主任であられた１９８２年より２期４年間、教室幹事を、それに先立つ２年間は研修医担当主任を命ぜられ、この６年間は文字どおり手取り足取りの、とても密、かつ、温かいご指導をいただきました。

彼の専門は乳腺腫瘍学、とくにホルモン療法で、主導された全国組織ACETBCによる本邦初の大規模無作為化前向き臨床試験が、本邦におけるEBM構築のための臨床試験の先鞭をつけられたと同時に、堪能な英語を駆使され、ACETBCを国際的なものとされました。また、乳癌研究会最後の会長として、乳癌学会設立に極めて大なる貢献をなさったとのことです。

国立がんセンター中央病院より帰室された教授ご就任当時は、学生運動によって義塾も荒廃状態であったようですが、一般・消化器外科医員を、各自が総論班と臓器班のダブルに属する体制をいち早く作られ、それぞれの班では活発に研究が行われました。発表ものびのびとできるようになり、旧、島田信勝 教授下では、外科学会への演題応募が１題と限られていたものが、班長が許せば何題でも応募できることになり、憧れの外科学会総会での発表が激増したことは、そのほんの一例にすぎません。「総論の阿部」といわれた所以でしょうか。

１９８７年に第87回外科学会、１９９０年に第28回癌治療学会を、いずれもホテルニューオータニ東京で主催されましたが、このほかに大小さまざまな学術集会等の長を務められたので、教室は大忙しの毎日でした。外科学会のための活動も活発で、東奔西走はもちろんのこと、次のようなことがありました。大阪での学会を終えて帰京の際、新幹線グリーン車で乗り合わせた他校外科教授たちほぼ全員を、当時存在した食堂車へ招待し、そこの高級ウイスキーが底をついてしまったのです。ご本人が大酒豪であられたこともありますが・・・。

このシーンも忘れられません。さる売り出し中の教授（故人）に料亭に招待され、私がお供をということになりました。宴席たけなわの頃、その教授から「外科学会でシンポジウムをやらせて・・・」と言われた直後、阿部教授がそばにあった盥（たらい）の、料理を冷やしておいた水を同教授の頭に、「頭を冷やせ」とばかりに浴びせて席を蹴ってしまわれました。

彼のとっておきの余興は「傷痍軍人」で、浴衣姿・白い手拭で頭と片目を覆い、白いタオルで巻いた座敷帚を松葉杖に見立てて、終戦直後に見られた光景を模写したものでお見事でした。

1986年、第14回国際癌学会議＠ブタペストの帰路、ウイーンのホテルで

とても懐かしいです。

今頃は黄泉の国で、お父上のやはり名誉教授でいらっしゃる阿部勝馬 第４代義塾医学部長（第２次大戦で焼尽と化した大学病院再建の大功績者、『醫學部六十周年誌』）と大好きなお酒を飲み交わしていらっしゃることでしょう。また、塾員、静枝 令夫人の多大なご貢献にも深く敬意を表させていただきます。

終わりに、本稿作成に当たり、池田　正 乳癌学会元理事長（53回）のご教示に深謝いたします。池田君による追悼文は、同学会機関紙『ニュースレターNo 26（２），２０２１』に掲載予定とのことです。

Ars longa, vita brevis.

学芸は長く、人生は短し。

（彼のお好きだったラテン語箴言）

了

診療体系グループ紹介

小児外科

黒田　達夫（61回）

小児外科はこどもの一般・消化器ならびに呼吸器の外科治療を行なう診療科で、外科の中でも最も新しい分野です。慶應大学の小児外科は日本の草分けとして１９５９年に傳田俊男先生をリーダーに発足し、以来、諸先輩の活躍により、慶應大学小児外科グループ全体としても国内外から高い評価を得ています。

慶應大学の小児外科では、伝統的に消化管神経系の先天的な形成異常であるヒルシュスプルング病や消化管機能を臨床、研究の中心的なテーマとしてきました。免疫組織化学や内圧測定から始まった研究は、今日、原因遺伝子の探索や幹細胞治療による再生医療の可能性をテーマに展開されています。また小児がんについても、がん幹細胞やがん細胞のリプログラミング、免疫チェックポイント蛋白阻害などの免疫療法の基礎研究の他、国際共同臨床試験の事務局など、教室はわが国の小児がん研究や臨床治験の中核となっています。そのほか小児呼吸器外科分野の嚢胞性肺疾患に対する周産期治療や、リンパ管腫を中心とした脈管異常の基礎研究、臨床試験などにおいても、それぞれの分野を牽引しています。加えて小児の移植治療では慶應大学は本邦の拠点の一つとなっており、成人の一般・消化器外科と連携してこれまで肝臓、小腸の移植手術を行ない、国内屈指の良好な成績と手術実績を積み上げて来ました。小腸移植例は脳死移植を含めて既に５例を数え、全例が生存しています。また従来禁忌と言われた血液型不適合症例などリスクの高い肝移植で実績をあげています。これらと併行して移植免疫に関する基礎研究も積極的に進めています。大学病院内では周産期・小児医療センターの中隔として総合的外科診療と、上記のような専門的外科医療の双方を担っています。

慶應大学小児外科の大きな特徴は、地域基幹病院、国立・都立の小児病院、大学病院に多くの人材を出していることであり、また、これらの施設における後進の小児外科医の育成や施設間での臨床・研究の連携が、慶應大學小児外科グループ全体を支える非常に大きな力になっていることであると思います。今後も福澤の残した「贈医」の精神を失わずに手段を尽くした小児医療に真摯に取り組み、小児外科学の多くのフロンティア分野への新たな挑戦を続けてゆきたいと思います。

開業

池上みなみ内科クリニック

南雲　正士（62回）

令和２年11月、東京都大田区池上の駅前通りに、内科・循環器内科・心臓血管外科を標ぼうする「池上みなみ内科クリニック」を開設いたしました。大田区は私が生まれ育った地です。なかでも池上本門寺の門前町であるこの町は憧れでもありました。そのような場所に縁あって、クリニックを開業できる喜びはひとしおであります。

当院が目標としているのは、元気に生きる喜びに溢れていて、いつまでも生きがいを感じられる地域社会を実現することです。クリニックの理念は、「人生百年、心も身体も健康、お互いが支えあえる、前を向いて生きていく喜びにあふれた、豊かで余裕のある社会を創ります。」としました。そして、ミッションは、「いつでもなんでも相談、手を差し延べて、患者さんとご家族を安心させること。」です。新しく集まってくれたスタッフと、目指すべき方向性や毎日遭遇する人との行動や声掛けに注意して、ブレのないように共有しています。

慶應義塾には慶應義塾高等学校からお世話になり、刀林会のみなさまからはもちろん、三田会のつながりのなかで多くの方々から、たくさんのことを教えていただきました。学ばせていただきましたひとつひとつに感謝しております。慶応義塾大学医学部卒業、同外科学教室に入局、心臓血管外科を専門としました。家内の南雲美也子も循環器内科専門医です。家内は専門医として超音波検査を手伝ってくれています。循環器領域は得意分野ですが、今後は、プライマリーな内科医として、また地元大森医師会の一員として地域の医療に貢献して参る所存です。

三四会ゴルフ部から始めたゴルフは、今では大切な趣味となっています。コロナ禍であっても解放されたフェアウエーは最も安全な場所の一つとして捉えています。そんなゴルフでの自慢の一つはセントアンドルースオールドコース#17番ロードホールでバーディーをとれたことです。コロナ禍を克服して皆様と#19番ホールを楽しめることを祈念しております。

クリニックにマイナス80度のディープフリーザーを用意しています。厚労省からファイザー社のワクチンを直接配送される基本型医療機関として認められました。クリニックでは少ないと思います。４月から医療従事者、５月からは一般高齢者の順に、今、医師としてやるべきことを、新型コロナなんかに負けるものかの信念で、小さなクリニックではありますが率先して、毎週３９０人にワクチン接種を行っております。

娘２人が専修医、研修医として慶應義塾大学病院でお世話になっております。不出来でありますが、お見かけの際には優しくご指導よろしくお願いいたします。今後とも、刀林会のみなさまからのお力添えをよろしくお願いいたします。

開業

安井　信隆（69回）

２００５年から勤務しておりましたけいゆう病院を退職し、２０２０年７月に横浜市保土ヶ谷区に「天王町セントラルクリニック」を開業いたしました69回生の安井信隆と申します。

開業のきっかけは、２０１９年初頭の慶應外科フォーラムで大阪大学医学部の土岐祐一郎教授の講演を拝聴したことでした。その講演の一部で、アメリカの論文から引用した、「55歳を超えた外科系医師の手術成績が低下する」というデーターが提示されました。演者本人も冗談ぽく自分もそろそろ手術をやめて引退したほうがいいのではないかと話され、会場でも軽い笑い声もあがりましたが、当時私は53歳でしたので、軽いショックを受けました。長時間手術や夜間の緊急手術後の疲れが残るようになり、手術に対して体力的な不安を感じるようになっていました。けいゆう病院は働きやすかったものの、定年も意識するようになり、短い外科医としての期間で体力の限界を感じながら手術件数を積み上げていっても、合併症が多くなると患者や周囲にも迷惑がかかってしまい、自分にとっても辛くなる状況がふと浮かんできました。当然ながら、60歳を超えても高い手術技量を発揮されている先生方も多いと思います。ただ自分としては外科医の定年をより明確に実感するようになりました。時期を前後して、10年前ほどに開業した外科系勤務医であった同級生と会食の機会があり、開業について相談したところ、外科医の定年について気づくのが遅いといわれ、60歳からでは手遅れになると脅され（なにが手遅れになるかは明らかでありませんが）、強く早期開業を勧められました。その後、縁あって相鉄線天王町駅前に開業する運びとなりました。

保土ヶ谷区医師会に入会しましたが、刀林会では、中村修三先生（53回生、胃班）、棚橋達一郎先生（58回生、食道班）が所属しております。また安藤暢敏先生（50回生、国際親善病院院長）の奥様の安藤真姿子先生（55回生、耳鼻咽喉科）も所属しており、皆様よりひとかたならぬご助力を頂き、心強く感じております。生憎、時期が悪くコロナ禍の嵐の中への厳しい船出となりました。小さいクリニックではありますが、何とか舵取りを誤らず、地域医療を進めていく所存です。外科医としての定年を自分なりに決めましたが、医師としての定年はまだまだ先だと感じております。これからも皆様方からのご指導ご鞭撻を頂けますよう心よりお願い申し上げます。

また、当クリニック開業内覧会の際には、刀林会、三四会の諸先輩をふくめ、数多く先生よりお花や、お祝いを賜りました。紙面の関係でご紹介できず誠に申し訳ありませんが、この場を借りまして厚く御礼申し上げます。

開業

地域密着の訪問診療で患者さんを支えたい！先生がた、往診のリアルな現場を一度体験してみませんか!?

訪問診療　ゆめクリニック
院長　赤津　知孝（74回卒）
副院長　赤津　友佳子（78回相当卒）

本当にたくさんの皆様のご支援とご協力によりまして、開院２年目を迎えることができました。とりわけ、刀林会の先生がたには、この場をおかりしまして、深く感謝の意を申しあげたいと思います。

10年来住んだ、この横浜・戸塚の地で「地域密着の訪問診療で患者さんとご家族を支えたい！」との思いで開院しました。診療時間は午前９時から午後５時ですが、緊急時は24時間、365日、対応しています。

内科、緩和ケア内科、皮膚科を中心に診療を行っており、訪問エリアは、横浜市の戸塚区、泉区、栄区、港南区、保土ヶ谷区、南区となっています。

コロナ渦で、病院では、ご家族は面会もままならない状況とお聞きします。住み慣れた我が家で療養を継続されたい方や、人生の旅立ちを控えた方など、もし何かお困りのことがありましたら、お気軽にご相談いただけましたら、さいわいです。

また、国民の３人に１人が65歳以上という超高齢化社会を背景に、最近は「訪問診療の現場って、いったいどんな感じなんですか？」や、「一度、往診のリアルな現場を体験してみたいんですけど」という問い合わせが増えております。

刀林会の先生がたで、もし、このような興味のある先生がいらっしゃいましたら、ぜひクリニックまでお声かけください。お待ちしております。

最後になりますが、今後もご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます！

ゆめクリニック　訪問診療
戸塚区戸塚町6005の3（戸塚駅前の医療モール内）
☎045・443・6216
午前9時～正午　午後1時～5時　緊急時24時間・365日対応

開業

あさか内科クリニック

半田　寛（80回）

埼玉県朝霞市郊外の複合商業施設カインズ朝霞店の２階に、２０２０年12月『あさか内科クリニック』を開院しました。

どうして開業したの？どうして朝霞で？とよく質問されます。つい数ヶ月前までは天職と思っていた外科医をしており、複雑な長時間手術や緊急手術も決して嫌いではなくむしろ張りきるタイプで、周囲の人を巻き込みながら明るく元気に外科診療を行っていました。若い頃は外来診療があまり好きではなく、毎日手術だけをやっていたいと思っていましたが、徐々に外来診療のやりがいや楽しさを覚え始めました。担当患者が増えるにつれて外来コマ数も増えていき、私の外来診療で満足されて感謝の言葉をいただくこともあり、大変嬉しく充実感も感じていました。以前はいい手術を数多く行うことが目標目的でありましたが、徐々に手術は自分が提供したい医療のひとつの手段に変化していき、受け持った患者さんの一生を診るということに大きなやりがいを感じるようになっていました。そんな折、開業した諸先輩同僚の話を聞き、中学高校時代の友人の独立起業（別職種）した話を聞いて、自分も40代半ばになり新しいことに挑戦したい思いが強くなり、独立開業に強い憧れを感じるようになりました。今回、私が開業した場所は朝霞市郊外の荒川沿いで周囲にクリニックがほとんどない地域です。そのような地域であれば、今まで慶應外科で培ってきた知識、技術、経験、私の個性を十分に生かして地域貢献できるのではないかと思い、ここ朝霞市で開業することを決意しました。外科医の時は専門外だからと逃げていた患者さんの症状一つ一つに真摯に向き合い、緊張感を持って診療を行いながら、日々勉強を痛感する毎日です。独立開業して初めて、いかに今まで慶應外科の看板に自分が守られていたのかということも強く感じます。所属していた大きな組織をはじめて離れ、今はまだ小舟で大海に漕ぎ出したばかりの状態です。自己責任のもとに自由を選択していく期待と不安に一喜一憂しておりますが、毎日非常に楽しく充実した日々を過ごすことができております。開業することによって、手術という高度な医療技術を提供することはできなくはなりますが、地域に密着したかかりつけ医を目指し、継続性のある全人的な医療を行っていきたいと存じます。これからも引き続きご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。

あさか内科クリニック

慶應義塾大学病院 外来 外科担当表

初診外来（午前）

一般・消化器外科
- 月（腫瘍センター）◎北川雄光
- 火 阿部雄太
- 水 八木洋
- 木 ○尾原秀明
- 金 北郷実
- 土 川久保博文

小児外科
- 月 ◎黒田達夫
- 火 高橋信博
- 水 交代制
- 木 ○山田洋平
- 金 加藤源俊
- 土 ○山田洋平

各月変更 藤野明浩

心臓血管外科
- 月 ○伊藤努
- 火 山﨑真敬
- 水 木村成卓
- 木 ◎志水秀行
- 金 泉田博彬
- 土 高橋辰郎
- 秋山章

呼吸器外科
- 月 朝倉啓介
- 火 ◎淺村尚生
- 政井恭兵
- 水 加勢田馨
- 木 ○菱田智之
- 大久保祐
- 金 ◎淺村尚生
- 土 大久保祐

脳神経外科
- 月 秋山武紀
- 火 ○佐々木光
- 水 ◎戸田正博
- 木 三輪点
- 金 高橋里史
- 土 植田良

◎印 診療部長　○印 診療副部長

特殊外来（午前）

- 月 血管 松原健太郎
- 肝胆膵 北郷実
- 火 血管 尾原秀明
- 腸 岡林剛史
- 水 乳腺 高橋麻衣子
- 食道・胃 入野誠之
- 木 肝胆膵・移植 中野容
- 血管 松原健太郎
- 乳腺 関朋子
- ヘルニア 堀周太郎
- 金 腸 岡林剛史
- 肝胆膵・移植 茂田浩平
- 土 食道・胃 清島亮
- 乳腺 松田諭
- 関朋子
- 脳血管障害 茂田浩平
- 脳神経（第1・3・5） 堀口崇
- 小児 秋山武紀
- 土 呼吸器 加藤源俊
- 交代制

特殊外来（午後）

- 月 肝胆膵・移植 北郷実
- 食道・胃 川久保博文
- 松田諭
- 呼吸器 朝倉啓介
- 機能疾患パーキンソン病（月1回） 大平貴之
- 火 肝胆膵・移植 阿部雄太
- 田中真之
- 内視鏡 中村理恵子
- 呼吸器（漏斗胸） 政井恭兵
- 水 乳腺 高橋麻衣子
- 呼吸器（気胸） 加勢田馨
- 免疫療法 戸田正博
- 脳腫瘍補助療法Ⅱ 佐々木光
- 小児移植（第1・3） 星野健
- 木 食道・胃 北川雄光
- 乳腺 関朋子
- 肝胆膵・移植 堀周太郎
- 血管 尾原秀明
- 松原健太郎
- 呼吸器 菱田智之
- 脳・定位放射線（第1） 小林正人
- 小児移植 山田洋平
- 金 腸 岡林剛史
- 松井信平

腫瘍センター外来（午前）

- 月 初診 北川雄光
- 乳腺 永山愛子
- 水 乳腺 林田哲
- 関朋子
- 木 乳腺 林田哲
- 金 乳腺 永山愛子
- 腸 松井信平
- 土 乳腺 林田哲

腫瘍センター外来（午後）

- 月 乳腺 永山愛子
- 水 乳腺 林田哲
- 関朋子
- 木 乳腺 林田哲
- 高橋麻衣子
- 金 乳腺 永山愛子

訃報

- ●山東 正和君（33回相） 令和2年1月13日
- ●宮内 邦昌君（31回） 令和2年1月27日
- ●阿部 令彦君（30回） 令和3年3月7日
- ●小林 義郎君（30回） 令和3年4月17日

編集委員

委員長 川村雅文
副委員長 石井良幸
顧問 佐藤周三
顧問 磯部陽
顧問 小澤壯治
顧問 古梶清和
顧問 儀賀理暁
顧問 齋藤淳一
顧問 藤野明浩
顧問 大塚崇
顧問 下島直樹
顧問 落合大樹
顧問 吉武明弘
顧問 木村成卓
顧問 松原健太郎
顧問 中村理恵子
顧問 松本暁子

編集後記

新型コロナ感染症が猛威を振るい、緊急事態宣言やまん延防止等重点措置が発令されるなど、これまでの当たり前と考えていた生活が一変した。人が集まる事象は減少し、リモート対応が増加した。観光、娯楽、飲食業界等は大きなダメージを受け経済は縮小し、人との触れ合いも少なくなった。また、地球温暖化が原因と考えられる気象・環境変動も著しく、何とも味気なく空漠たる不安に駆られる日々が続いている。そんな生活をニューノーマルと認識しなければならないのか、人間的生活としてはやはりアブノーマルだろう。人間が人間らしくあるために、世界のリーダーは一丸となって早急にSDGsの実現を進めて欲しいものだ。

Y・I

人事異動

- 小澤壯治（60回）東海大学医学部消化器外科学領域主任教授退任
- 多摩丘陵病院 副院長就任
- 片井均（61回）国家公務員共済組合連合会立川病院院長就任
- 申範圭（61回）東京歯科大学市川総合病院心臓血管外科教授退任
- 宮島伸宜（61回）聖マリアンナ医科大学教授、東横病院院長退任
- 松島病院院長就任
- 田村明彦（67回）栃木医療センター院長就任
- 澤藤誠（67回）川崎市立川崎病院副院長就任
- 井上仁人（69回）東京歯科大学市川総合病院教授就任
- 堀口崇（69回）慶應義塾大学看護医療学部教授就任
- 小柳和夫（71回）東海大学医学部消化器外科領域主任教授就任
- 河野光智（72回）埼玉医科大学総合医療センター呼吸器外科教授就任
- 古泉潔（75回）足利赤十字病院副院長就任
- 岡本一真（78回）近畿大学医学部心臓血管外科准教授就任

刀林会ホームページがアクセスしやすくなりました。

外科学教室　ホームページにアクセス

http://keiosurg.umin.jp/

同窓会 をクリックしてください。

ID、パスワードの入力の必要はございません。
よろしくお願いいたします。

刀林会会員管理システムについて

郵便物発送先、一斉メールにてのお知らせなど
「刀林会会員管理システム」にておこなっております。

メールアドレス、ご勤務先、ご自宅住所などの
ご変更があった場合は、
ご自身にてアップデートしていただくことを
お願いいたします。

開業についてのお知らせ

開業の際は、同窓会へご連絡をお願いいたします。
記念に刀林会より盾を進呈いたします。
よろしくお願いします。

＜刀林会　事務局＞
〒160-8582　新宿区信濃町35
慶應義塾大学医学部外科同窓会事務局
TEL：03-5363-3800
FAX：03-3359-9130
tourin-h@keio.jp